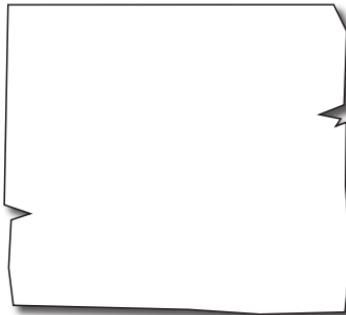


7つのワクワク枠 さらにもう1つの エピローグ ～分岐点～



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

地球人類も
いつか、ここへ——。

妻瑠音、親友心笑君、おじいさん…と生み出し合う
青年期・壮年期さんぽのフルーツフル誕生物語

SAMPO FRUITS



7つのワクワク枠

エピローグ

’94 春 (7ヶ月後)

学生当時の、その研究発表の内容は、そのまま論文にまとめられ、マイナーな文献に掲載された。しばし反響があつたらしかつたものの、その後、ほとんど、みんなに忘れ去られてしまつたらしかつた。

そのことは、大学の必修のカリキュラムをこなすのがハードになりつつあつた一人の医学生にとって、かえって、ありがたかつた。

’95 初夏 (1年9ヶ月後)

瑠音は、夢を実現して、晴れて小学校の教師となつてゐた。その小学校は、大学生時代に暮らしていた地方都市の郊外にあつた。

大学5年生の僕は、初歩的な臨床の実習が始まつてゐた。

’96 初夏 (2年9ヶ月後)

瑠音は、小学校で、子どもたちを相手に、はりきつてゐた。

大学6年生の僕は、医師国家試験に向けた勉強に明け暮れてゐた。

そのころには、大学内のポストを得るべく大学院に進学して学問をする道は、すっかり断念してゐた。ライフサイエンスの研究の現場の様子を肌身で知つた僕は、“生計のための臨床の合間に自分のペースで好きなように成果を磨き上げるべく、コツコツと学問——知愛を続けるのがベストだらう”という結論に達してゐたからだ。

’97 春～ (3年7ヶ月後～)

医師国家試験に合格した。卒業後に所属した医局の意向で臨床の内科研修をすることになった僕は、とある病院に派遣された。

その医療現場で、バリバリの臨床医の仕事が生半可な気持ちでは勤まらない現実を肌身で知った。

夜中の2時ごろに(当時及び始めていた)ポケベルで呼び出され、雪の中、自転車のペダルをこいで病棟にたどり着き、患者さんの最期を看取ったこともあった。

あるウイルスが、患者さんから自分に感染してしまったかもしれない不安にかられるようなアクシデントもあった。

休日に、いざというときのためにポケベルを持ち待機していたこともあった。

患者さんに感情移入しすぎて、涙を抑えられないこともあった。

ストレスで心身を病みかけたこともあった。

…

周囲の先生に何度も助けられた。

睡眠を削りながら、感染症のリスクを背負いながら、ストレスを抱えながら…つまりは寿命を削りながら、淡々と仕事をこなし続けるバリバリの臨床医の先生方を心底尊敬するようになっていた。

ドジして周囲に頼ってばっかり、バランスくずしてばっかり…の自分は、臨床医として、明らかに失格で、——落ちこぼれだった。

それとは対照的に、瑠音の方は、小学校で、水を得た魚のようにイキイキと子どもたちと関わり合い続けており、——優秀だった。

それは、瑠音にとっての天職だった。

’98 春 (4年6ヶ月後)

バリバリの臨床の仕事は、中途半端な覚悟では勤まらない。

僕にとって、バリバリの臨床の仕事は—— 学問の片手間にでき

ることじゃないし、心の自由を奪い身も心もズタズタにして自分を学問どころじゃなくさせてしまう激烈なストレス源であるし、何より、患者さんたちをはじめ多くの方々に迷惑をかけてしまう営みだ。

研修から医局に戻った僕は、意を決して辞表を出し依願退職した。

この体験は、自分に向いているのは、面と向き合って直接特定の誰かのために貢献することではなく、コツコツと何かを育むことで間接的に不特定の誰かのために貢献することだと僕に確信させた。

僕は、コツコツ何かを創り上げることによって、間接的にみんなに貢献するのが向いている—— そういうタイプの人間だ。

思いきって仕事を辞めてしまった僕を、それでも「好きなことをするのが一番よ」と励ましてくれたのは、瑠音だった。

この退職を期に僕は、願の心からの自由を得て、成果を磨き上げて広めるべく、コツコツと学問——知愛に専念し始めた。

なけなしの貯金だけを頼りに——。

’99 初秋（5年後）

そんな非現実的な心底自由ライフを半年体験した僕は、貯金が底を尽きかける前に、細々とアルバイトを始めることにした。そのアルバイトは、なぜか近くのスーパーで品出しだった。バイト代は確かに安かったけれど、それでも仕事は楽しく、ありがたかった。

’00 春（5年7ヶ月後）

その後、幸いにも、研修医時代に経験のあった、精神的な負担が比較的少なくて、なおかつ、迷惑がかからず、自分でも役に立てる

“医師としての仕事”に巡り会うことができた。

おかげで、生活が、どうにか、まわり始めた。ありがたかった。

’05 夏 (10年10ヶ月後)

非常勤のアルバイトの身分だったので、確かに不安定であり続けていたし、決して裕福でもなかつた。

それでも、そんな僕と、瑠音は結婚してくれたんだ。

婚約指輪を手渡していたくせに、どうしても口から言えないまま、それぞれ家路についてしまったのちに、その頃すでに世の中に広く普及していた携帯電話のメールで伝えた。

君は、自分以上に大事な宝です。結婚しよう。 さんぽ。

ありがとうございます。よろしくお願ひします。 瑠音。

——ありがたいのは、こっちの方こそだった。

それから、夢見ているみたいに幸せな新婚生活の日々を過ごした。

’06 初秋～ (12年後～)

自分なりに学問——知愛の成果をコツコツと育み続けていた一方、赤ちゃんは、なかなか授からなかつた。

本屋さんで、『タイミング妊娠法』という本に出会えたおかげで、妊娠検査薬で陽性と出るところまでは、たどり着けた。

それでも、心臓の拍動が確認されないままに流産することを、何度か繰り返したのだった。

本屋さんだけでなく、その頃には、一般に広く普及していたインターネットも利用しながら情報を収集して、さまざまな試行錯誤を

続けたけれど—— そのうち、妊娠検査薬で陽性にもならなくなつた。

このまま、ずっと授からないのかもしれない——。

しばしば、そのような悲観的な想いにとらわれかけた。

それでも、瑠音は、自分でネットで“卵管造影検査”を見つけ、それを受けると言い出し、それにトライすることにした。

僕は、赤ちゃんをなかなか授からない不安を乗り越える気分転換のためにも、自分なりに育んだ学問——知愛の成果を少しでも広めるべく、ウェブサイト上で、ささやかに発表するために、コツコツと準備し続けることにした。

’08 春 (14年6ヶ月後)

ウェブサイト作りが一段落して、生まれて初めてウェブサイトをアップした。

それから、しばらく経つてからのことだ。

妊娠検査薬の陽性が確認されただけでなく、瑠音のお腹の中で、小さな心臓の拍動のピコピコが初めて確認されたのは——。

ミラクルだと感じた。

心底ありがたいと感じた。

こうして、僕らは、赤ちゃんを授かったのだ。

このまま、無事育ってくれ！

わが家の新たな宝になってくれ！

そう願い続けた。

’09 冬 (15年4ヶ月後)

その日、仕事を終えて間もなく、瑠音の陣痛の知らせを受けた。僕は、勤務先から病院へと急いで自動車で直行した。

瑠音の出産に立ち会った。その最中、出産が、命を振り絞りながらの営み——命を活かしながらの営み、命を輝かせながらの営み、命を満たしながらの営みであることを肌身で感じ続けた。

どれくらい時間が経ったのだろう。どれくらいハラハラしたのだろう。どれくらい心が揺さぶられたのだろう。

瑠音は、ついに、赤ちゃんを出産した。

母子ともに無事だった。それが何よりだった。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。
音楽イン ♪ Birthtime
すやすや眠っている赤ちゃんを、ほつとして心笑みながら見つめている母の安らぎの時間——。

これで、僕は、もういつ死んでもいいや。

ぶっちゃけ、一瞬そう思えていたほどの自分が、そこにいた。

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

’09 初夏 (15年7ヶ月後)

あの岬にて——。

瑠音に抱かれている赤ちゃん——。

「おお、おまえさんたちの赤ちゃんかい？」とおじいさん。

「そうだよ」と僕。

「おお、おお、とっても、かわいらしいのよ」笑みを浮かべながらのぞき込むおじいさん。「——どっちかっていいたら、母親に

似ておるな？」

やさしい笑みを浮かべている瑠音。

「頭の“2つのつむじ”的位置は、父親とそっくりだぜ。アハハッ」

「どれどれ——、——あつ、本当じや。そっくりじや。

アッハッハッ！」とおじいさん。

「アハハハッ」と瑠音。

瑠音は、おじいさんに赤ちゃんを抱っこさせた。

やわらかな笑みを浮かべ続けているおじいさん——。

「わしゃあ、幸せもんじや。すっこい幸せもんじや。ありがとうよ」

“3つ+1つ”的笑顔がそこにあった——。

’09 夏 (15年10ヶ月後)

「ワッ——!!!」 瑠音の絶叫が家じゅうに響き渡った。

別の部屋にいた僕は、ドキリ！として、あわてて駆けつけた。

「いったい、どうしたんだい！？」と僕が尋ねた。

「おむつ取り替えようとしていたら、突然おしっこが始まったの。

噴水みたいに——。もう、びっくりしすぎちゃったよ～！」

「——」 ···

’09 初秋 (16年後)

わが子のお昼寝の前に、『Birthtime』のメロディーを使い、抱っこして子守唄のように歌ってあやしたり、おんぶして小さなキーボードで演奏してあやしたり…試行錯誤を繰り返していた。

’09 初冬 (16年3ヶ月後)

「おお！！」「やったあ！」

わが子が初めて歩いた日——。

’10 春 (16年7ヶ月後)

わが子と一緒に、初めて公園まで散歩した日——。

毎日、ますます夢見ているように幸せだった。

’11 春 (17年6ヶ月後)

大震災が直撃したのは、第2子の出産が近づいていた頃だった。

岬のおじいさんは、命からがら高台に逃げて無事だったけれど、家が地震と津波で全壊してしまい、のちに仮設住宅で暮らし始めるまでの間、僕の実家で生活することになった。

わが住まいも、被災していた。

停電、断水、ガス停止の生活を何日も強いられた。

“パンが食べたい”とリクエストした妊娠中の瑠音のために、道路のすべての信号が消えている中を、貴重なガソリンを消費して自動車でスーパーにたどり着き、店外の大行列の最後尾に並んだ。

1時間以上並んだけれど、パンは売り切れで買えなかつた。それでも、代わりにせんべいやスイーツが買えてありがたかつた。

のちに、電気、水道、ガスが順次復旧したとき、心底感謝した。

温かいシャワーが、どんなにありがたいと身にしみたことか——。

何よりも、命の無事が、どんなにありがたいことだったか——。

’11 初夏 (17年8ヶ月後)

瑠音の出産に再び立ち会った。出産が、命を振り絞りながらの営み——命を活かしながらの営み、命を輝かせながらの営み、命を満たしながらの営みであることを再び実感した。

母子ともに無事であったことに、心から感謝した。

こうして、わが家で、新たな宝が増えた。

夢見ているみたいに幸せだった一方で—— その後、原発事故の影響を含む、さまざまな厳しい現実に直面し続けた。

’11 夏 (17年11ヶ月後)

みんなで帰省した折、仮設住宅のおじいさんの元へ。

ニコニコしながら紡がれた、おじいさん語録——

「おお、こりやまた、かわいらしい子じや。おめでたいやき～♪」

「上の子も、ずいぶん、大きくなったの。ありがたいやき～♪」

「わしゃあ、もう大満足じや。いつ死んでもいい」

「アイアイ愛じやな。ワクワク枠、イキイキ息シリーズの最新版が見つかったわい。アッハッハッ！」

「おまえさん、ずいぶん、やせたんじやないか？ この子らのためにも、体調管理、しっかりするんじやぞ」 年をとつて弱り、心配されるべきおじいさんが、逆に心配してくれた。確かに、その頃、原発事故を含む問題に対する心労がたり、僕の体重は減っていた。

’11 初秋（18年後）

岬のおじいさんが老衰のために亡くなつた。

おじいさんからの手紙には、感謝の気持ちがつまつっていた。

若者たちへ

先日は、尋ねてきててくれて、どうもありがとう。

うれしかつた。

たとえ、どんなにつらいことがあつたとしても、なんでもいいから、ありがたいなあと思えることを見つけて続けるんじゃぞ。

それができれば、きっと、心からの笑いをとりもどせる。

それが人生じゃ。

おまえさんらは、まだまだこれからじゃ。

幸せに生きるんじゃぞ。

これまで、本当に、どうもありがとう。

ありがとう。じゃあに。

岬のおじいさんより。

追伸、ちびちゃんたちにもよろしく。

追追伸、“AINSHUTAIN”にもよろしく。

’13 初夏～ (19年8ヶ月後～)

『大栗先生の超弦理論』という本に出会って、衝撃を受けた。

この本との出会いをきっかけにして、全く予想外に、物理学の大ブックサーフィンが始まり、物理学にのめり込むことになった。

それは、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲をさらに深く広げようとする試みにつながっていた。

それは、エキサイティングで、ワクワクドキドキもので、暇や退屈からはるかにほど遠い、有意義な、ありがたい体験となった。

’14 初秋 (21年後)

それから1年ほどの間、自己流で物理学に取り組んだ結果、光子や重力子の幾何モデルが生まれ、半信半疑だったけれど、ついに、重力が量子化できたかなと思えるような成果にまでたどり着いた。

でも、その成果は、従来の物理学の常識、“エネルギー保存則”と真っ向から対立していた。

教科書に載っているエネルギー保存則が間違えているはずがないし——こっちの重力の量子化が間違えているのだろう。それにしても、いったい、どこがどのように間違えているのだろう？・・・

そのときだ。高校時代の親友心笑君のレアな笑顔が心に思い浮かんだのは。心笑君——ニュートン君、なつかしいなあ。

高校時代、彼は、難解な数式がびっしり並ぶ物理学の教科書を読んでいたときもあったっけ——。

チンブンカンブンだった僕が「ずいぶん、すごい本読んでいるね」と思わず口にしたとき、「100%理解できているわけじゃないけど、

僕もニュートンやAINシュタインみたいに、早く自然——*nature* のパズルを解いてみたいんだ」と、そっと僕に打ち明けてくれた心笑君——。

彼は、授業中に鋭い質問を投げかけていたこともあったっけ——。

「なぜ、 $F = ma$ が成り立つのですか?」と心笑君。

「それこそ、天才ニュートンが発見したことだからです」と先生。

『『プリンキピア』には、 $F = ma$ の式がどこにも載っていません』

「厳密には、18世紀の数学者がこのような数式に表したからです。

それでも、その数式の起源は、まさに天才ニュートンの発見です」

「天才ニュートンは、どうやって、それを発見したのですか?」

「知りません。ニュートンに聞いてください。ニュートン君」

クラスメイトたちが、どっと笑っていた中での、真顔の心笑君。

心笑君——ニュートン君は、とりわけニュートンのファンであり、

熱く語っていたっけ——。

「ニュートンって、すごいんだぜ」

「どんなふうに、ニュートンは、すごいんだい?」

「AINシュタインも成し遂げられなかつたような大きな統合を成し遂げながら新しい物理学を体系化し、自然——*nature* との調和性を高めていたという意味で、すごいのさ」

「大きな統合——」

「ニュートンは、例えば、地上の物理学と天上の物理学を統合していたし、さらには、それまでの物理学の成果、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ…の成果を統合していたのさ」

「へえー。ニュートンってすごいんだね。てっきり、AINシュタインの方が、ニュートンよりもすごいと思っていたけれど——」

「ううん、比較なんてできないさ。確かに、AINシュタインも、すごいんだよ。それまでの常識を覆しながら、自然——natureとの調和性をより高めるような成果を生み出しているからね。

どちらとも、それぞれに、それぞれのすごさを持っているのさ」「確かに——。——うん。君は、きっと、君にしかできない何かを成し遂げて、21世紀のニュートンになれるよ」

「——ありがとう」 そう言ってレアな笑顔を見せてくれた心笑君。あの心笑君——ニュートン君なら、きっと何か教えてくれるだろう。今ごろ、彼は、いったい、どこで何をしているんだろう？

’15冬 (新春) (21年4ヶ月後)

心笑君——ニュートン君と再会したいという思いが募った僕は、お正月に地元へ帰省した折に、彼の自宅を訪れることにした。

彼は、意外にも、何かの事情で物理学の大学院を中退して、それから帰郷して地元の高校の物理学の教師になっていた。さらには、驚いたことに、彼は元教え子と結婚しており、最近赤ちゃんが生まれていた。娘の名は、^{えあ}笑愛—— 僕に抱っこさせてくれたりもした。

久々に再会した心笑君は、名前らしく笑みをたたえ続けていた。

もう笑顔がレアではなくなっていたのだ。

ニコニコしながら紡がれた、心笑君語録——

「教師になったのは、確かに最初は生活のためだったけれど、意外に面白いんだ。“先生、どうして $F = ma$ が成り立つんですか？”という質問を生徒から受けた時には、内心震えるほど興奮して、しばらく脱線してしまったよ」

「それでも物理学をする夢は、ずっとあきらめていなかつたよ」

「コツコツと自由に学問を続けていたんだ」

「今の自分はボランティア学者みたいなものだね」 …

そんな彼に、彼の書斎で、さっそく、例の成果を見せてみた。

彼は、食い入るように読んだ。何度も読み返していた。

「どうもありがとう——」 心笑君が、しみじみとつぶやいた。かと思うと、「——うん、間違いない。ここから育まれる物理学は、従来の物理学を根底から改善させながら、自然——nature との調和性をより高められる可能性がありそうだよ」と続けて言った。

「——え？ でも、エネルギーが保存されていないよ。

従来の物理学の常識と真っ向から対立してしまっている。だから、きっと、どこか根本的に間違えているんだろうね」と僕。

「——間違えているのは、従来の物理学の常識の方、例外のないエネルギー保存則の方さ」 全く意外な答えが返ってきた。

「え？ でも、エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ？」

「いくらなんでも、それは、ありえないんでないかい？」

「その気持ち、とっても、よくわかるよ。僕も同じだったから。

でも、よく確かめてみたら、例外のないエネルギー保存則の方が間違えていると納得できるのさ。例外のないエネルギー保存則は、

よく確かめられてこなかつたウワサにすぎなかつたつてことのさ」

「ウワサ——たとえ親友の君の言葉でも、さすがに納得できないよ」

「——実証するよ。例えば、ここにりんごがある」 心笑君は、りんごの1つを手に持つた。「ここでりんごを手放せば、どうなる？」

「落ちるよ」

「落ちて、そのあとどうなる？」

「落ちて、そしたら、大きな音が響いて、りんごの一部がへこんで、
そのあと、りんごが転がるよ」

「そのとき、大きな音が響いて、りんごの一部がへこんで、りんご
が転がる際のエネルギー源は何だい？」

「位置エネルギーだよ。落下すれば、位置エネルギーが運動エネル
ギーに転換する。その運動エネルギーが元になって、大きな音が響
いたり、りんごの一部がへこんだり、りんごが転がったりするのさ」

「その通りだね。学校の授業で習った通りだよ。

では、次に、このりんごを、そうっと床に置いたらどうなる？」

「どうなるって——」

「大きな音、りんごのへこみ、りんごの転がりは、どうなる？」

「生じないよ」

「その通り」 心笑君は、実際にそうっとりんごを床に置いてみてか
ら再び口を開いた。「ここで疑問に思わないかい？」

「どんな疑問？」

「大きな音を響かせたり、りんごをへこませたり、りんごを転がし
たりできたはずのエネルギーは、どこへ行ったのか？ って疑問さ」

「——どこへ行ったんだい？」

「消滅したのさ。そのことが、以上で実証したことになる」

「ええ！？ 待った、待った。でも、エネルギー保存則によれば、
エネルギーは消滅しないはずだよ。きっと、大気との摩擦熱とかに
変化して、エネルギーが逃げたんだよ」

「同じような実験は、空気がほとんどない真空中でもできるよ」

「——」 ···

「確かに真空中では音が出ないけれど—— 落とされたりんごは、
へこんだり転がったりするのに、そつと下ろされたりんごは、
へこまないし転がらない。大気との摩擦熱や音としてほとんどエネ
ルギーが逃げようがない真空中において、りんごをへこませたり転
がしたりできたはずのエネルギーは、いったいどうなったんだい？」

「——」 ··· 消滅したとしか考えられない？ 「——ええ！？
エネルギーって、実は消滅するの？」

「そうさ。同じような実証実験は、卵や陶器の皿でもできる」

「——確かに」

「しかも、エネルギーが消滅する事実に加えて、自然界で一見エネ
ルギーが保存しているように見えている事実があるから—— 自然
界のどこかでエネルギーが生成していなければおかしいってことも
わかる。つまり、エネルギー消滅の実証実験から、エネルギーは、
どこかで生成しているはずだってことも無理なく予想できるのさ」

「——」 ···

「実際、エネルギーの生成の例は、見つけられる。

例えば、従来の量子物理学においてさえも、すでに、短時間であ
れば仮想粒子が生成＆消滅することを認めている。この仮想粒子が
生成＆消滅する過程では、その短い時間の間、平均エネルギーがブ
ラスマイナス0であり続けているのではなく、平均エネルギーがブ
ラスであり続けていて、その間はエネルギーが生成しているんだ。

しかも、時空が不連続ならエネルギー保存則が成立しないことを、
ネーターの定理が証明している。だから、プランクスケールで時空

が不連続である君の成果において、光子や重力子の生成過程がエネルギーの生成過程であっても全く問題がなくなるんだよ。

これらの意味で、エネルギーの生成は、自然——natureと調和しているだけでなく従来の物理学とも調和していることになるんだ。

しかも、例えば、電荷エネルギーや磁極エネルギーは、周囲に生成する仮想光子を何度も剥ぎ取って光子を生成させても、その都度再生する究極の再生可能エネルギーでもある。この電荷エネルギーや磁極エネルギーからエネルギーを引き出す方が、質量エネルギーからエネルギーを引き出すより、はるかに安全で桁外れに効率がいい。例えば、陽子1つ分の質量エネルギーよりも、陽子1つ分や電子1つ分の電荷エネルギーの方が、 10^{18} 倍以上も大きいから」

「 10^{18} 倍——」 チンパンカンパンで意味もよくわからないまま、僕は、その部分を繰り返した。——心笑君には、かなわないや。

「そうさ。この桁外れに効率のいいエネルギー源こそが、あらゆる電磁波のエネルギー源でもあるんだ。太陽から地球へ届く光、電気ストーブから放出される赤外線、携帯電話やスマホから放出される電波も例外じゃない。もちろん、電子等の電荷が振動する際に、熱運動エネルギーとして周囲に散逸する形ではエネルギーが消費される。でも、同時に、生成した仮想光子がはぎとられて電磁波が周囲に放出される形だけではエネルギーは全く消費されないんだ。だから、例えば、太陽の寿命は従来の計算より延びるはずだし、スマホの電池は電波そのもののエネルギーとしては消費されていないはずだし、健康被害を含め悪者にされることの多い電磁波は、上手に利用できれば、本来人類の大きな味方になりうるはずなのさ」

そこで、僕は決意を固めた。「——心笑君、ここから先は、ぜひ、心笑君が育ててみてくれるとうれしいんだけど、どうかな？」

「本当にいいのかい？　これを十分に育めれば、もしかしたら、物理学を成熟させることができて本当に21世のニュートンになれるかもしれないんだぜ？　こんなに、やりがいがあってワクワクできる学問分野は、めったにないんだぜ？」

「いいも何も、誰より心笑君こそが最適役だよ。

それに、その方が、きっと全人類のためにもなっているよ。

——それに、恩返しもある。

僕らが結婚できたのは、君のおかげでもあるのだから——」

「——」

「心笑君——　君こそ、21世紀のニュートンになってほしい。

それこそが、僕や瑠音を含めて、みんなが喜ぶことさ」

「——ありがとう。

実は、恩返しすべきなのは、こっちの方こそなんだよ」

「——え？」　？？？

彼は、机の引き出しから、ある文献を取り出した。

それは、20年以上前の学生時代に僕が書いていた、あの論文を収録した文献だった。見るからに、ぼろぼろになっていた。

「それは——」

「そう。君の研究論文さ。君の成功が心底うれしくて、すぐ購入して、当時から読んでいたんだよ」

「——」　・・・

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、

保存状態が悪かったりしていたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返していたからなんだ。ここ20年くらいの間に、何十回何百回と読み返しているよ」

「——」言葉にならなかつた。涙が込み上がり、しばし、涙ぐんだ状態のまま涙をこぼすのをこらえた。

「それで、君の論文がヒントになって—— 実は、僕も、すでに新しい物理学を育んでいたんだよ。大学院に進学した頃から——」

「——」 · · ·

「だから、君の重力の量子化と、僕の重力の量子化が、瓜二つであるのを見て、驚いただけでなく、心底うれしかつた。

それを見て、確信したんだ。間違いないんだなって——。

自分が進んでいる道が間違えていなかつたんだよって、本家本元から、お墨付きをもらえたような気分だよ」

「——」 · · ·

「君と僕は、別々に同じことを発見したことになるんだよ。

僕は、ずっと孤独に、ひそかに、この新しい物理学を育んできていたから、そのことが、どんなに心強いことか——」

彼は、机の引き出しから、プリントアウトされてクリッピングされていた用紙の束を取り出すと、重力の量子化の成果が載っているページを広げて見せてくれた。

確かに瓜二つだった。それでも、彼の成果の方が、はるかに厳密で、はるかに深みを持っていることは、一目瞭然だった。

ページを閉じた彼は、「まだまだ完全からほど遠くて未完成なのだけれど——」と言いながら、その用紙の束を、僕に手渡してくれた。

僕は、しばらく食い入るように読みながらページをめくり続けた。

心笑君が、はるかに先に、はるかに広く進んでいることは明らかだった。彼は、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲を、物理学のほぼ全分野にまで広げていた。

「時間は無限じゃないから、どこかで切り上げなければならないんだけどね」 心笑君は、静かに、そう言った。

心笑君は、素スピノル物理学としての体系化をすでに見事に成し遂げ、新しい物理学を誕生させていたように思われた。

それは、まさに、心笑君の健やかな自己実現——自己フルーツ化、そして、彼ららしいフルーツの現出だった。

その成果には、さまざまな統合も含まれていた。

重力と電磁気力の統合

重力子と光子の統合

質量エネルギーと、電荷エネルギー&磁極エネルギーの統合

原始的な力、弱い力、強い力、中間子力のフラクタルな統合

素粒子物理学の標準模型における“3つ世代”的フラクタルな統合

静止質量エネルギーと運動エネルギー（ β 熱運動エネルギー）の統合

ブラックホールの特異点とファイヤーボール（ビッグバン）の統合

新しいブラックホールの生成と新しい宇宙の生成の統合

ニュートン、アインシュタイン、ホーキング…の成果の統合

弦とループの統合

…

それらの統合を含んだ成果に興奮しながら僕は口を開いた。「すごいよ！！ アインシュタインもできなかつた統合を成し遂げているよ！！ 矛盾が減って、自然との調和性が高まっているよ！！

間違いないよ！！ 君は、まさに21世紀のニュートンだよ！！

早く公表しようよ！！」

「——ありがとう。

でも、まだ自信ないんだ。まだまだ完全から、ほど遠いから——。それに、まだまだ改善の余地があるだけでなく、大きく間違えているところもあるかもしれない——。

本物のニュートンも、自身の研究成果の発表をためらっていたらしいけれど、その気持ち、今、とてもよくわかる気がするんだ。

——それで、提案なんだけれど、一緒に連名で公表しないかい？重力の量子化の説明は、ふたりともが別々の発見者だったのだし、そもそも、君の成果である3ステップス自然知愛が大いに役立っていたのだから」

「——。——それは、おこがましいよ。

こっちは、ちょっとした思いつきを、片手間に、ちよこちよこつと細々と試してみただけの話さ。

本物のニュートンのように、統合を果たしながら新しい物理学を体系化し、自然との調和性を高めているのは、まさに、心笑君、君なんだよ。3ステップス自然知愛については、それが役立っていたことを、さらっと触ってくれるだけで、こっちは十分満足だよ。

この各種の統合を含む物理学の新しい体系化、自然との調和性の向上は、まぎれもなく君が誕生させた成果であり、すべて君の業績であるべきなんだよ。

その方が、21世紀のニュートンとして、誰もが納得できることだよ。それに、その方が様になっていてカッコいいよ。

よっ！ 21世紀のニュートン！ 人類の宝だよ！」

名前らしく笑みたえていた心笑君が、さらに笑顔になった。

そのときの心笑君の心笑みを—— 心に刻みつけた。

’16 初夏 (22年9ヶ月後)

それから1年半近く経った頃、心笑君の新しい物理学の体系は、さらに磨き上げられて、ついに公表されるに至った。

“時間が無限でないから”という条件の中の妥協の産物の一面もあつたとのことだったけれど、心笑君らしい見事なフルーツだった。

さまざまな新しい統合が示されていたのみならず、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにもなるだろう、画期的な応用にたどり着くためのヒントも示されていた。

心笑君は、かつて人類が2000年間地球中心の思い込みにとらわれていたように、これまで人類が300年間エネルギーの永久不滅の思い込みにとらわれていたことを指摘した。

心笑君は、“エネルギー保存則が成り立つからエネルギーは消滅も生成もしない”とは決して言えないことを指摘した。

心笑君は、エネルギーの消滅を、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”と象徴的に呼んでもいいような、簡単な実験で実証できることを指摘した。

心笑君は、電荷エネルギーや磁極エネルギーが究極の再生可能エネルギーであること、それらが例えば太陽光のエネルギー源であることを示した。

心笑君は、陽子や中性子といった核子1つの質量エネルギーよりも桁外れに大きい、電子1つの電荷エネルギーや磁極エネルギーから、はるかに安全に桁外れに効率よくエネルギーを引き出せる可能性を示した。

心笑君は、この新しい物理学によって、さまざまな問題を根本的に解消できる可能性があることを指摘した。

...

これらの新しい物理学の成果は、健やかな全人類レベルのライフの誕生のために役立つだけでなく、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のためにも役立ち、多くの人々を喜ばせられるはずだと僕らは確信し始めていた。

心笑君は、きっと、多くの人々に祝ってもらいながら、もっともっと幸せになれるだろう。僕は、そう確信し始めていた。

’16 夏 (22年10ヶ月後)

ところが――

予想に反して、専門家の方々は、心笑君の成果を「科学的でない」「非科学だ」「反科学だ」「科学否定だ」「根拠のない誤科学だ」…というレッテルを貼って否定した。さらには、その専門家の方々の批評を鵜呑みにしたメディアが、心笑君の評判をおとしめた。

あげくは、一般の方々までもが同調して、成果と全く関係のない人格攻撃までも展開し、激しい罵詈雑言^{ばりぞうごん}を浴びせかけた。

「バッカじやねえの？ エネルギー保存則は、最も普遍的な原理であり、常識中の常識だ。このエネルギー保存則に異議を唱えるなんて、まともな人間ではない。教科書を読めよ。教科書を」

「目立ちたがり屋だ。自己顕示欲の塊だ。売名行為だ。論文を売るためいでっちあげているのだ」

「荒唐無稽のインチキ野郎だ」「21世紀の大嘘つき野郎だ。世紀の詐欺師、ペテン師だ」「人類に対する〇〇だ」「人類の〇点だ」「〇〇〇」「〇〇〇〇」「〇〇野郎」「大〇〇者」「あ〇ば〇た〇」「おた〇こなす」「すっと〇どっ〇い」「〇〇〇〇〇」…

何よりまず、よく確かめることが最優先されるべきじゃん。

本来、“よく確かめてみよう”と提案されるべきところじゃん。

誰もが、知愛の営みを実践し始めるべきところじゃん。

それなのに、ただやみくもに、よく確かめないままに、袋だたきにしているだけなんて・・・

――それとも、これが今の科学の現状なの？

――科学っていったい何なの？

――科学的であるってどんな意味なの？

——もはや、フィロソファーとして、自然との調和性を高めようとする嘗みから、はるか遠くに、かけ離れてしまっていないだろうか？ …

それに——

せっかく、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためになつたり、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために役立つことをしている超善人であるはずなのに、なぜ、ここまで非難して、よりによって極悪人にする必要があったのだろうか？

全人類の飛躍のためのヒントが、せっかく、つまっているのに、何ゆえに、よく確かめないままに、やみくもに、つぶそうとするのだろう？

おかしいよ。根本的に何かがおかしい。

どうかしているよ。根本的に何かがどうかしている。

ここにある奇妙さは、いったい何なのだろう？

’16 夏 (22年10ヶ月3日後)

それだけではない。

専門家やメディアの方々や一般の方々によって一方的に悪者にされた心笑君は、その悪評に同調する、学校関係者の方々、保護者の方々を含む、身近な方々によって退職に追い込まれた。

心笑君は、生活の糧を失ったのだ。

心笑君は、社会的に抹殺されたのだ。

あんなに優しい心笑君が…… ——あんまりだよ。

僕は、電話だけでは心もとなかったので、急遽、彼に直接会うために帰郷した。意外にも、心笑君は、笑みをたたえ続けていた。

「決して絶望しちゃダメだぜ。絶対死んだりなんかしちゃダメだぜ。誰が何と言おうとも、僕は、心笑君の価値を認めているから」と僕。
「ありがとう。心配してくれて。僕は大丈夫だよ」と心笑君。

僕は、さらに念を押した。「——決して、決して、決して、早まつたりなんかしないんだよ。もし、絶望感とか、ユーワツな気持ちに襲われたら、ゆっくり、ゆったり深呼吸することが効くよ。体験的にも実証されているし、自律神経の働き的にも理にかなっている」

「ありがとう。さんぽ君」心笑君は、さらに心笑んだ。

「いざとなつたら、いつでも連絡してくれよ。

経済的な支援もできるから」

「ありがとう。

でも、経済的な支援はいけないよ。君らも、子育て中なんだから。君と瑠音さんの育児の妨げになるなんて、絶対イヤだよ」

「心笑君——」

「アルバイトするなり何なりして、地道に生きるさ。

もし、それでもダメなら、親の仕事を手伝ったり、家事をしたりしているよ。だから大丈夫だよ」

「でも——」

「さんぽ君、ありがとう。僕は今、とっても幸せなんだ」名前らしく心笑み続けている心笑君——。「大丈夫だよ。君らや家族を含めて、みんなに心底感謝していることは、1プランク長も揺らいでいないのだから」

心笑君は、感謝できることを見つめ続けているからこそ、心から笑っている——ってこと？

’16 初秋 (23年後)

ところが――

それからほどなくして、心笑君は、本当に死んでしまったんだ。

その知らせを地元の親から受けたのは、初秋だった。

音楽イン ♪秋 Autumn

なぜ？ なんで？ 大丈夫だって言ってたじゃないか？

――実際は、それほど、つらかったの？

実際は、どんな言葉であっても不十分で、もっと寄り添い続けるべきだったんじゃないかな？

毎日通い続ければよかったんじゃないかな？

やっぱり、落ちこぼれ医者だよ――。 . . .

――心笑君は、うすうす気づいていたんじゃないかな？

こういう状況になる可能性があったことを、はじめから――。

だから、不安で迷っていたのもあったんじゃないかな？

だからこそ、連名にしようと提案していたのではないか？

――僕は、何てことをしてしまったのだろう。

連名で公表していたら、何かが変わっていたかもしれない。

. . .

――僕のせいだ。

僕のせいで、まだまだ若い心笑君が死んでしまった。

せっかく、まだまだ、これからだったのに―― …

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

心笑君が不憫で不憫で、いたたまれない気持ちになった。

あんなに優しかった心笑君が、こんなにひどい仕打ちを受けて、しまいには、本当に死んでしまうなんて―― あんまりだよ。

僕は、自分の一部を喪失したような気持ちになった。

——彼の優しさがフラッシュパックした。

「この科学雑誌、よかつたら読んでみないかい？」

「女子更衣室で、君が倒れたとき、真っ先に先生に知らせてくれたのは、瑠音さんだったんだよ。水着姿のまま校舎内を走って」

「この間、『北の国から'89 帰郷』で熱烈なファンになったって聞いていたから、準備していたんだ」

「彼女は、そんな子じゃないよ。よく確かめた方がいいよ」

「君たちが、うまくいっていると、周囲も幸せな気持ちになれる。

そんな、すてきなカップルだよ」

「ありがとう。気持ちちは十分に受けとったよ。心の中で大事にさせていただくよ」

「君の成功が心底うれしくて、すぐに購入して、当時から読んでいたんだよ」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかったり、

保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ」

「ありがとう。

でも、経済的な支援はいけないよ。君らも、子育て中なんだから。君と瑠音さんの育児の妨げになるなんて、絶対イヤだよ」

「大丈夫だよ。君らや家族を含めて、みんなに心底感謝していることは、1 プランク長も揺らいでいないのだから」

涙があふれて、あふれて、あふれて…

僕と瑠音は、その晩、ずっと泣き続けた。

’16 初秋 (23年2日後)

葬儀に参列した際、心笑君のご両親が挨拶にきて、息子の親友でいてくれたことに感謝を示した上で、中学時代からの元々の持病の悪化が原因だったのだと説明してくださった。

そんな持病なんてあったの？

なぜ黙っていたの？ 水くさいじゃないか？

僕に気を使って、最後まで、相談しないでいてくれていたのかい？

いずれにしても—— 僕のせいで、心笑君は激烈なストレスを抱えることになってしまい、寿命を縮めてしまったよ。

何てことをしてしまったのだろう。

ごめんよ。ごめん。ごめん。…

心笑君のご両親は、話の最後に、息子に頼まれていたというクリッピングされた用紙の束と彼が書き遺した手紙を渡してくださった。

音楽イン ♪感謝別れ Thank you, See you.

夏岬さんぽ君へ

もしものときのために、手紙を書いておきます。

持病のこと、内緒にしていてゴメンよ。

高校時代からずっと、君に余計な心配をかけたくなかったから、いつもと変わらぬ親友でいてほしかったから、どうしても言えませんでした。どうか、ゆるしてほしい。

それと、今の医療の限界を、何十年もの間、身にしみて知っていたから、せっかくお医者さんになった君に相談できなかったことも、どうかゆるしてほしい。

本当は、もともと、僕は、こんなに長生きできるはずではありませんでした。実は、高校を卒業できたことも、大学を卒業できたことも、奇蹟だって主治医の先生に言われていたほどだったんだよ。

だから――

君のことだから、きっと、“自分のせいで、早く死んじゃった”とかと思ってしまうだろうと思うけれど、もうそれ以上、絶対に絶対に、そのように思わないでほしいのです。

決して決して、そうではありません。

全く逆です。

君のおかげで、こんなに長生きできていたのです。

そもそも、高校を卒業できたのも、大学を卒業できたのも、君のおかげでした。

そして、本物のニュートンさながらに、自然知愛に没頭できたのも、君のおかげでした。君の学生時代の論文のおかげで、新しい物理学に取り組むことができたのだから。

この新しい物理学の探究は、極上のエンターテイメントの1つたりうる、ワクワク感の尽きない、自然(nature)のパズル解きでした。

同じような気持ちを、本物のニュートンも味わっていたんだろうなと何度も思いました。

おかげで、何度も何度も、本物のニュートンの境地を体験できたような気がしていました。おかげで思う存分、物理学を心底エンジョイできました。おかげで、夢がかないました。

この極上のパズル解きの楽しみのおかげで、時間を忘れ、病を忘れ、いつしか、すこぶる体調がよくなっていました。

おかげで、結婚に前向きになれただけでなく、出会いにも恵まれました。

結婚できて、父親になれたのも、君のおかげだったのです。

僕は、君のおかげで、こんなにも充実した人生を満喫しながら、何十年も予想を超えて長生きできていたのです。

おかげで、寿命を全うできているだけでなく、寿命が最大限に延びて、完全燃焼できた感を味わいながら、大満足できているのです。

だから、もしものときは、寿命延長最高記録更新大往生なのです。

だから、本当に本当に、ありがとう。

親友でいてくれて、心から心から、ありがとう。

ただ一方で、今後もしものことがあった場合、妻知愛ちあいと娘笑愛えあいがどうなってしまうのだろうと想うと胸が張り裂けそうになります。

もしものことがないことを祈っていますが、もしも今後何かあつた場合、少しでも妻と娘の心の支えに、さんぽ君に。なってもらえないでしょうか？ そうしてもらえるなら、大変ありがとうございます。

かたじけないですが、どうかよろしくお願ひします。

井束心笑

P.S.

僕の物理学の研究成果、親友への手紙バージョンを、楽しんでもらえたらうれしいです。この中の数学は、ほとんど中学や高校の数学レベルだから、きっと理解できるはずだよ（って書いたら失礼かな）。極上エンターテイメントの1つを体感してもらえたうれしいです。

この楽しさや感動が少しでも広まれば、うれしいです。

それと、完全に時効だと思うから書くけれど、高校時代、瑠音さんのこと、僕も好きだったんだぜ。持病のこともあったし、何より君らの気持ちがわかっていたから、告白どころではなかったけれど。

それでも、瑠音さんの相手が君でよかったですって何度も思っていたよ。

相手が君だったから、なおさら、高校時代、君らがうまくいっていると、自分のことのように、うれしかった。

のちに、君たちが結婚して家庭を築いていることを知っては、ますます、自分のことのように、うれしかった。

物理学における統合より、君らの統合の方が僕の誇りです。

なんちゃってね（笑）。

彼は、^{やまい}病を乗り越えるべく、新しい物理学に希望をたくして、命を燃やしながら研究に取り組み続け—— 命を振り絞りながら—— 命を活かしながら、命を輝かせながら、命を満たしながら成果を公表してくれていたんだ。 それなのに——。 …

もし、みんなが、よい評価を下して、心笑君を宝にしてくれていたならば、心笑君は、もっともっと長生きできていたのかもしれないかったのに——。もっともっと幸せを味わえていたのかもしれないかったのに——。

それなのに——。 それなのに——。 …

いろいろ気づいてあげられなくて、ごめんよ。

… ——ごめん。ごめん。 …

こちらこそ、親友でいてくれて、ありがとう。

心から心から、ありがとう。ありがとう。

…

僕にできることがあったら、何でもするよ。何でも——。

…

音楽終了 ♪感謝別れ Thank you, See you.

’17 冬 (23年4ヶ月後) (1)

なぜ心笑君が社会的に厳しい目に合わされるに至ったのか、その理由が少しずつわかり始めた——。 音楽イン ♪冬 Winter

その理由の根幹は、一人一人が、よく確かめないままに“例外のないエネルギー保存則”の常識を信じ続けたからだ。

それは、一人一人が、よく確かめようとしないまま、ただなんとなく“例外のないエネルギー保存則”というウワサ”を素直に鵜呑みにし続けたからだ。

それは、かつて、多くの人々が、よく確かめようとしないまま、ただなんとなく“地球を中心にして太陽がその周りを回っている”というウワサを素直に鵜呑みにし続けていた状況と似ているのだろう。

それは、かつて、クラスメイトのほとんどが、よく確かめようとしないまま、ただなんとなく“瑠音が年上の彼氏と付き合っている”というウワサを素直に鵜呑みにし続けていた状況とも似ているのだろう。

…

そもそも、たとえ優れた権威のある教科書に載っている内容であったとしても、たとえ優れた権威のある専門家の方々が伝える内容であったとしても、たとえ優れた権威のあるメディアの方々が伝える内容であったとしても、100%正しいとは限らない。

そもそも、あらゆるウワサは、100%正しいとは限らないのだ。なぜなら、人間だから——。人間は、ときに間違えるから——。よく考えてみれば、あたりまえのことだ。

それに、この場合、心笑君が指摘していたエネルギーの消滅は、“ココエのりんご”等の実験によって、明確に実証されている。

心笑君が示したように、例えば、りんご、卵、皿…を静かに下ろす過程で、明らかに、エネルギーの一部が完全に消滅している。

落ちついて、よく確かめてみれば、エネルギーの非永久不滅性は、いつでもどこでも簡単に実証できる、明々白々のことだ。

この“例外なくエネルギーが保存しているという考えが自然——
nature から乖離していること”の実証は、“地球の周りを太陽が回っているという考えが自然——nature から乖離していること”の実証よりも、はるかに簡単もある。

つまり、“地球の周りを太陽が回っている”というウワサを、よく確かめないまま鵜呑みにし続けながら“バッカじゃねえの”と非難していた方こそが実は間違えていたと実証されるよりも、“例外のないエネルギー保存則”というウワサを、よく確かめないまま鵜呑みにし続けながら“バッカじゃねえの”と非難していた方こそが実は間違えていたと実証される方が、はるかに簡単なのだ。

…

なぜ、人は、よく考えてみなくなっているのだろう？

なぜ、人は、よく確かめようとしないまま、すべてのウワサが100%正しいと思い込み続けるのだろう？

専門家の方々が言っていたから？ メディアの方々が伝えていたから？ 教科書に書いてあったから？ 先生方に教えられたから？ 身近な誰かに教わったから？ …

いずれにせよ、なぜ、人は、自分で、よく確かめようとしなくなっているのだろう？

なぜ、人は、言葉だけにしばられて、形——自然——nature そのものを無視するようになってしまっているのだろう？

なぜ、人は、従来の説と異なる説を、異なるからという理由だけで、排除するようになっているのだろう？

ここにある、思考停止、確かめ放棄、現実無視、排他性は、いったい、何が原因で生じているのだろう？

忙しいから？ 疲れているから？ めんどくさいから？

それだけじゃないだろう。

かつて、ほとんどの人類は、2000年もの間、“地球のまわりを太陽が回っている”と、よく考えもせずに、よく確かめないまま、信じ続けていた。2000年もの間、人類のほとんどが、太陽のまわ

りを地球が回っているという主張を、よく考えもせずに、よく確かめないまま、ばかげていると非難して排除し続けていた。

ほとんどの人類は、300年もの間、“エネルギーは永久不滅だ。例外なくエネルギーが保存する”と、よく考えもせずに、よく確かめないまま、信じ続けている。300年もの間、人類のほとんどが、ときにエネルギーが保存しないという主張を、よく考えもせずに、よく確かめないまま、ばかげていると非難して排除し続けている。

つまり、ここにある営みは、かつて、ガリレオらが繰り広げていた自然——natureとの調和性を高めるフィロソフィ——知愛の営みと対照的な、“新しいタイプの宗教”のような営みなってしまっているのではないだろうか？

“エネルギーの永久不滅性”や“例外のないエネルギー保存則”だけを常識とするべし的な教義を持つ“新しいタイプの宗教”——。

教科書が示す内容を100%丸暗記すべし的な“新しいタイプの宗教”——

つべこべ言わずに、指導者の話を素直に聞くべし的な“新しいタイプの宗教”——

よく考えずに、よく確かめずに、ひたすら100%信じるべし的な“新しいタイプの宗教”——

...

だから—— 決して、単に、忙しさ、疲れ、めんどくささ…と関連している怠慢さだけが原因ではないだろう。

それほど同調圧力が強いことも原因だろう。

それほど主流から外れることに対して、ビクビクと不安になること、つまり、知らず知らずに個人的にサバイバルするだけのために周囲に流され続けていることも原因だろう。

例えば、『裸の王様』に登場する“王様が裸だ”と言えなかった臆病な大人たちの境遇と同じように——。

——つまり、怠慢さだけでなく、臆病さも原因だろう。

♪冬 Winter '17冬 (23年4ヶ月後) (2) に続く

'17冬 (23年4ヶ月後) (2)

よく考えようとも、よく確かめようともしない怠慢心と、“地球が回っている”“王様が裸だ”と言えなかったような臆病心のせいで、心笑君は、さらに延びえたはずの寿命を縮ませられた——。

それだけじゃない。

それらの怠慢心と臆病心のせいで、健やかな全人類レベルのライフが誕生するチャンスが奪われ、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のチャンスが奪われ、全人類は、せっかく延びうる寿命を縮ませられ続けているんじゃないだろうか？

だから、この場合、周囲に流され続けていることは、長い目で見れば、自分自身を脅かすことにつながっているんじゃないだろうか？

...

これじゃ、心笑君がうかばれないだけでなく、全人類がうかばれないよ。

一人一人の心の中にひそんでいる、これらの怠慢さ、臆病さのせいで、このまま、何十年も何百年も何千年も、集団で催眠術にかかっているような状態になり続けながら、健全さ、より長い寿命…から遠ざかり続けるのか？

個人個人の怠慢さのせいで、個人個人の臆病さのせいで、みんなして、自然——nature から乖離した幻想を共有し続けながら、不

健全さ、より短い寿命…にしばられ続けるのか？

そんなのつまらなすぎる。そんなの愚かすぎる。

…

教科書を学んだり、教科書の内容を教えたりすることだけでなく、自然—nature そのものを直視し、よく考え続けながら、よく確かめ続けながら教科書の内容を成熟させることもすればいいのに――。

数式を含む『コトバ』を見て、学んだり、説明したりすることだけでなく、自然—nature という『カタチ』も見て、自然—nature との調和性を高めることもすればいいのに――。

…

自然—nature を直視して、よく考え続けながら、よく確かめ続けながら従来の説明を改善しようとする新説を公言する勤勉で勇敢な存在が、自然—nature を無視し続け、よく考えようとも、よく確かめようともしない怠慢な存在、臆病な存在によって社会的に抹殺され続けるような世の中――。

勤勉で勇敢な存在の発言を軽視して排除しておきながら、怠慢で臆病な存在の発言だけを重視して素直に鵜呑みにし続けているだけの怠慢で臆病な存在にあふれている世の中――。

イキイキ、ウキウキの方ではなく、ヘトヘト、ビクビクの方を増幅させ合い続けている世の中――。

そんな世の中、絶対、病んでいるよ。

人間レベルのライフが病んでいるだけでなく、人間社会レベルのライフも、全人類レベルのライフも、病んでいる。

そのせいで、健やかな全人類レベルのライフが誕生できず、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化もできないでいる。

——確かに、人間レベルのライフの医者としては、落ちこぼれだ。当然、全人類レベルのライフの医者になれる保証なんて、これっぽっちもない。

しかし、それでも、オレは—— それでも、オレは、健やかな全人類レベルのライフを誕生させるべく、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を助けるべく、全人類レベルのライフの医者になったる！！

全人類レベルのライフの医者として、病を治したる！！

——いや、“治す”なんて、おこがましいだろ。

そうじゃなくて、各自が、自分自身で病を治すのを助けたる！！
各自が自分自身のためのライフセイバーになるのを応援したる！！
各自が自然治癒力を引き出して、自ら治るのをサポートしたる！！
そして—— 自ら治る支えになったる！！

心笑君の想いを、活かし続けながら、輝かせ続けながら、満たし
続けながら——。

心笑君の想いを、決して無駄にはしない。

心笑君の想いが、広まれ。広まれ。広まれ。

...

’17春 (23年7ヶ月後)

まず何より重要なことは、一人一人が、ヘトヘト、ピクピク、クヨクヨ…から、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…へとシフトすることだ。つまり、一人一人が、元気になることだ。

元気になるには、どうすればいい？

元気になるためには、『Off』と『On』のリズムが役立つ。

具体的には、睡眠と覚醒のリズム、休養と活動のリズム、適度な空腹とお腹が適度に満ちることのリズム、息を吐くことと息を吸うことのリズム…が役立つ。

元気になるためには、これらができることが、実は、ミラクルであり、ありがたいことなのだと感謝することも役立つ。

そうだ。元気になるためには、『For』も役立つ。

ほかにも、例えば、元気を取り戻すためには、心の底からの“好き、楽しみ、笑い”も役立つし—— 一人一人が、何らかの極上のエンターテイメントの存在に気づくことも役立つし—— 一人一人が、既存の何かを知ったり学んだりする喜びだけでなく、何かの新発見をしたり何かを新しく創造したりすることの“喜び、快感、心地よさ、達成感、満足感…”を体験することも役立つ。

心笑君も、そうであったはずであるように——

それに、元気を保つためには、ときに『Against』も役立つ。

例えば、何事も“過ぎない”ように、足るを知り程よいところでブレーキをかけることも役立つし—— 疲れや不調に気づいたら、無理してはダメと中断したり転換したりも役立つし—— 長い目で見て、広い目で見て、いつか、だれかに迷惑がかかることに気づいたら、それ以上はダメと歯止めをかけることも役立つし——。

そうだ。元気になるためには、『In』と『Out』も役立つ。

ほかにも、例えば、自分だけでなくみんなも喜ばすこと、自分だけでなくみんなも好きなことを育むことが役立つし—— 今だけでなく、遠い未来も、うれしいこと、ありがたいことを生み出すことも役立つ。…

つまりは、7つのワクワク枠のすべてが、あらゆるライフのすべての場面で役立つはずだ。ワクワク枠 For All Life だし——。

いずれにせよ、こうして、元気になり、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑み、快感、心地よさ、好き、創造性、遊び心、探究心、ウズウズ、やる気、喜び、歓喜、達成感、満足感…をほどよく味わいながら、健やかに生き続ければ—— 例えば、一人一人が、健やかに、寿命を延ばすことも可能になるだけでなく—— 健やかなフルーツフル自己実現も可能になるし、健やかな全人類レベルのライフの誕生、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために貢献することも可能になる。

心笑君のように——。

だから、一人一人が、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑み、快感…をほどよく味わいながら、健やかに生きることを志向し続けることこそが、全人類レベルのライフの自然治癒力の根幹であるはずだ！

この自然治癒力を活性化させることこそが、僕の使命であり、僕の自己実現——自己フルーツ化、自分らしいフルーツの成果だ。…

僕が、かつて出会ってきた、あらゆるフルーツは、自分自身のイキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、楽しみ、心笑み、快感、心地よさ、好き、創造性、遊び心、探究心、ウズウズ、やる気、喜び、歓喜…を味わうために役立ってきた。

だから、かつて受けとった、さまざまなフルーツを何十倍、何百倍にも増幅させながら—— 僕は、僕のできることの成果として、自分らしいフルーツを提供し続けよう。

この自身のフルーツも、誰かの、さまざまな形のフルーツの誕生を助けることにつながったら最高だ。

ニュートンフルーツが、心笑君フルーツをもたらしたように——
小学校の恩師フルーツが瑠音フルーツをもたらしたように——
心笑君フルーツや瑠音フルーツが、僕のフルーツをもたらしただけでなく、新たな誰かのフルーツをもたらすだろうように——。

ここにもフルーツの増幅があるだろう。

...

いずれにせよ、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ…にシフトするために、元気になるために、健やかなフルーツフル自己実現を促すために、心笑君フルーツ——エネルギー保存則の例外の実証は、最適なきっかけの1つになるだろう。

このきっかけが、極上のエンターテイメントである自然のパズル解き、新“ニュートン体験”…という広大な楽しみの存在への気づきをもたらし、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、元気…を引き出し、健やかなフルーツフル自己実現を促すのだから。

心笑君自身のときのように——

’17秋 (24年1ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父さん、実験を始めるよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1つの卵があります。これを

約70センチメートルの高さから、静かに、そつと、フライパンの上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけないじやん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

卵を約70センチメートルの高さから、静かに、そつと、フライパンの上に置いた。

「ほら、何も起きないじやん」「やつぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、この卵を、約70センチメートルの高さで手放して、フライパンの上へ向けて落とせば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ 卵が割れちゃうよ」

「割れどうなる？」

「卵の殻が割れて、中身が広がってしまう」「ベチャーとなる」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

「あなた——」瑠音の一声。

「大丈夫。僕が、責任を持つから。——では、いくぞ。やるよ。えいや！」 パツ、グシャ。 卵の一部がつぶれた。

「あれ、ゆで卵だったの？」

「残念。不正解」

「えー！ ずるいよ」「ずるーい！」

「するくない、するくない。生卵だなんて、一言も言ってないよ。つまり、こんなふうに実際に実験してみなきやわからないことがあるってことさ。それに、ゆで卵であるおかげで、いいことがある」

「どんないいことがあるの？」

「ゆで卵であるおかげで、僕が気持ちよく食べられるってこと——
——パラ、パラ、パラ… モグモグモグ…。

「もし、生卵で、やってみたければ、やってみてもいいよ」

「あなた——」

「あ、もちろん、責任は、きちんと自分で取るんだよ。
無駄な食品ロスは、父さん、ゆるさないよ。とっても、もったい
ないことからね。

——これで、父さんの実験は、終わりだよ。

あっと、ここで、みんなに問題だ。

卵を落としたら、卵はつぶれるのに、卵をそっと置いたときに、
何も起きなかつたのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」 「なぜ？」

「さあ、ぜひ、自分の頭で、よく考えてみよう。

自分の体で感じながら——」

’18 春 (24年7ヶ月後)

とある休日——。

「父さん、今から、新しい実験を披露するよ」 瑠音と、ちびっこ
たちを前にして、僕は言った。「ここに、1つのお皿があります。こ
のプラスチックじゃないお皿、陶器のお皿を1.2メートルほどの高

さから、静かに、そつと、床の上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」 その皿を 1.2 メートル
ほどの高さから、静かに、そつと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。

それでは、次の実験——。このお皿を、1.2 メートルほどの高さ
で手放して、この堅い床へ向けて落とせば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ お皿が割れちゃうよ」「大きな音が出る！」

「そのあと、どうなる？」

「皿が割れて、バラバラにくだけて、飛び散ってしまう」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみようか？」

「あなた——」 瑠音の一声。

「わかっている。父さん、今ここで、皿を落としたりなんかしない。
お皿が使えなくなったら、もったいないからね。

でも—— 実は、5 日ほど前に、母さん、誤って手を滑らせて、
お皿を床に落としてしまったことがあるんだ」

「え？」と瑠音。

「——母さん、あのとき、何が起きたか説明してくれないかい？」

「あのとき、確かに、ガチャン！ って大きな音をたてながら、お皿

が大小さまざまな大きさに割れて、飛び散ったわ。2メートル以上遠くに飛び散ったカケラもあったわ。

誰かが踏んづけてケガしないように掃除するのが大変だったから、よく覚えているわ」

「つまり、母さんは、すでに、先取りして実験してくれていたんだ」

「すごい」「すごいね」

みんなで拍手しよう。パチパチパチ…。——照れている瑠音。

「——これで、父さんと母さんの共同実験の披露は、終わりだよ。

あっと、ここで、みんなに問題だ。

お皿を落としたら割れたのに、お皿をそうっと置いたときに何も起きなかつたのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「——ぜひ、自分の頭で、よく考えてみてほしい。

想像力をふくらませながら——」

’18初冬（25年3ヶ月後）

とある休日——。

「みんな、今から、父実験をするよ」瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1つのスーパー・ボールがあります。このスーパー・ボールを約2メートルの高さから、静かに、そうっと、床の上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

スーパー ボールを約2メートルの高さから、静かに、そ うと、
床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「おお、本当だったね。何も起きなかつたね。

うん。では、次の実験に移るよ。もし、このスーパー ボールを、
約2メートルの高さで手放して、床へ向けて落とせば、何が起こる
でしょ？」

「簡単だよ。ポーンってばずむよ」「そうはずむ！」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

手放して落とすと、スーパー ボールはポーンと弾んだ。スーパー
ボールが最高点に到達したタイミングで、それをキャッチ——。

「ほら、はずんだ！」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。

これで、父実験は、おしまいです。——そこで、問題。

スーパー ボールを落としたらポーンと弾むのに、そ うと、置いた
ときにも起きなかつたのは、なぜでしょ？」

「なぜだろう。よく考えてみるよ」「ゆっくり考えてみるね」

’19冬(1) (25年5ヶ月後)

とある日の夜、子どもたちが寝静まった後、瑠音とふたりでリビングで会話した。それは、瑠音が投げかけた疑問から始まった。

「ねえ。あの3つの実験は、いったい何を意味していたの？」

「エネルギーの消滅が実証されていることを意味していたのさ」

「えー！？ ウソよ。だって、エネルギー保存則があるでしょ？」

エネルギーは種類が変換されるだけで、エネルギーの総量は減りも増えもしない。——中学や高校で習うことで、常識中の常識よ。

教科書にも、ちゃんと載っているわ」

「そう。僕にとっても、そのような“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。物理の試験問題も、その常識のおかげで、正解にたどり着けた。

でも、実際、エネルギーは、ときに完全に消滅するのさ」

「えー？ まだ信じられないわ」

「その気持ち、よくわかるよ。僕もそうだったから」

「空気との摩擦とかで、エネルギーが逃げたのじゃないかしら？」

「僕も、似たように考えたことがある。でも、同じ実験は、真空中であっても、同様に成立するよ。——だから、信じようが信じまいが、エネルギーが、ときに完全に消滅することを、卵や皿やスーパーボールの、あの簡単な実験が実証してしまっているのさ。

つまり、エネルギー保存則には、例外があつたってことなのさ」

「——教科書が間違えていたってこと？」

「まあ、そういうことになるね。教科書の中の“この宇宙で、エネルギーは減りも増えもしない”と説明しているような“例外のない

エネルギー保存則”が自然から乖離していると明らかに実証されていることになるのだから。

つまり、“例外のないエネルギー保存則”は、結局、これまで、ずっと、誰も、よく考えたり、よく確かめたりしてこなかったウワサの1つにすぎなかつたってことなのさ。

でも、よく考えて、よく確かめてみれば、ここから新たな自然のパズル解きを展開できるという意味で、これほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクできること、これほど楽しみが膨らむことはない。

——そのことに、はつきり気づかせてくれたのが、心笑君さ」

「心笑君——」

「心笑君にとっても、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だったはずだよ。高校時代に物理でトップの成績をとっていて、大学時代に理学部物理学科に進学していたくらいだったからね。

つまり、心笑君や瑠音や僕を含めて、みんなにとって、“例外のないエネルギー保存則”は、常識中の常識だった。

だから、静かに物を置く過程なんて、これまで何十億人もの人々が、それぞれに、それこそ何百回何万回と体験してきたはずなのに、その過程でエネルギーが消滅していることに、長らく誰も気づくことができなかつた」

「——。ねえ、キッチンで、何か飲んだり食べたりしてきてもいい？」 瑠音は、足早にキッチンにたどり着き、本当に何かを飲んだり食べたりしたらしかつた。

そうして戻ってきた瑠音は、口を開いた。

「ねえ。例えば、親が、赤ちゃんを静かに寝床の上に寝かせようと

している際に、エネルギーを消滅させていることに気づけなかつたってことも言える？」

「言える。毎晩、僕らがベッドに横になる際にも、バタン！と倒れたりせず静かにそうしていれば、誰もがエネルギーの大部分を消滅させている。それほど身近でありふれている。それなのに、エネルギーの一部を消滅させていることに気づくことは、誰にとっても難しいことだった。みんなが何百回何万回と物が落ちることや月が落ちないことを目撃していたのに、ニュートンが指摘するまで、万有引力の法則に気づくことが、誰にとっても難しかったように——。

でも、その難しいことを成し遂げていたのが、心笑君だったのさ」

「すごかったのね。心笑君——」

「ああ、すごかった。だから、心笑君は、少なくとも、そのことだけでも、きっと21世紀のニュートンと呼ぶに値するんだよ。

だから、エネルギーの消滅を実証している3つの実験は、古い常識から新しい常識への大転換の象徴でもあり、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”とも呼べるよ」

「“ココエのりんご”——」

「そう。心笑君は、生前、お正月にエネルギーの消滅を初めて僕に説明してくれたとき、まさに、りんごを使ってくれていたんだよ」

「ふふつ」

’19冬(2) (25年5ヶ月後)

「それでも—— 心笑君は、高校の物理教師だったから、とても葛藤していたはずだよ。エネルギーの消滅を簡単に実証できること

に気づいていたのに、生徒たちには、“エネルギー保存則が例外なく成立しますよ”と教え続けなければならなかつたはずだから。

でも、最終的に、心笑君は、エネルギーがときに消滅することを直視し続けながら、自然との調和性をより高める道、壮大な可能性を広げる道を選んだ。そのせいで、心笑君は失職してしまつたのだけれど——と僕。

「おかしいわよ。そんなの。心笑君は、せっかく、自然との調和性を高めてくれたり、可能性を広げてくれたり、みんなのためになることをしてくれていたはずなのに——

ハアー。心笑君、かわいそう」と瑠音

「そうだね。多くの方々が、よく考えないまま、よく確かめもせずに、“例外のないエネルギー保存則”というウワサをもとにして、心笑君を非難して、よってたかって心笑君を悪者にしていた——。

それは、かつてクラスメイトの多くが、よく考えないままに、よく確かめもせずに、変なウワサをもとにして君に冷たい態度をとつてしまつていたのと似ているよ」

「あれは、その意味で、象徴的な出来事だったのね。

逆に、よく考えたり、よく確かめたりしていれば、こういった悲劇への加担を回避しうるのに——。かつてのあなたのように——。

——ねえ、そもそも、心笑君を、ほめる、賞賛する、宝にする…というあり方も選べたはずじゃない？ それなのに、なぜ、よりによつて、心笑君をけなす、攻撃する、悪者にする…というあり方を多くの方々が選んでいたのかしら？」

「もっともな疑問だよ。人は、そもそも、誰に対しても、『For』の

方向、『Against』の方向、どちらの方向のあり方も、とろうと思えば、とることができる。それなのに、なぜ、心笑君に対しては、よりによって『Against』の方向のあり方だけが選ばれていたのか？」
「なぜ？」

「病んでいたからさ。Against Life 病という名の病——」

「Against Life 病——」

「この Against Life 病は、最初は、Against『Out』& For『In』タイプや Against『In』& For『Out』タイプの比較的軽い症状であったとしても、きちんと対処せず、放置し続け、暴走させ続けていれば、いずれ重症の Against『In』& Against『Out』タイプ、Against All Life の状態に陥つてしまいうる。

例えば、放置された自己嫌悪が、他人に投影されて周囲の人間への嫌悪へと至つてしまふとか、悪の成敗の名目で他人の危機を放置しすぎたがゆえに、めぐりめぐって自分自身も危機に陥つてしまふとか…を含めて、たとえ正義や道徳を重んじていても、知らぬ間に Against All Life コースを進んでいることがありうる。

しかも、いずれにしても、この Against Life 病は伝染しうる。

例えば、Against Life 病を発症している方々が生んだ、誤レッテルや非難…を含むネガティブなウワサを、よく考えないまま、よく確かめないまま鵜呑みにしてしまっても、その時点で、僕ら一人一人が Against Life 病を発症していることになりうる」

「すると、専門家やメディアの方々が Against Life 病を発症している場合、よほど注意していなければ、一般の方々も Against Life 病を発症してしまいうるのね？」

「そう。それは、『アタマ』の方向の方々が『Against』を選んでいれば、『カラダ』の方向の方々も『Against』を選びやすいということでもあるのさ。

ただし、それは、あくまで『Against』を選びやすいだけの話で、たとえ、『アタマ』の方向の方々が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥りながら『Against』を選んでいたとしても、『カラダ』の方向の方々が、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ちながら『For』を選ぶことは、決して不可能なことじゃないのさ」

「『Against』の連鎖を断つことができるってことね？ 私のウワサを鵜呑みにしなかった、あなたのように——」

「その通りさ。逆に『Against』の連鎖を断てなければ病んでしまう。かつてのクラスメイトと同じように。つまり、『Against』の連鎖を断って『For』を貫くことが、あらゆる方々から、あらゆる方々への Against Life 病の伝染、多くの方々への Against Life 病の広がりや蔓延を防ぐのさ。——これは、とても大きな分岐点の1つだよ。Against Life 病の伝染、広がり、蔓延は、健やかな全人類レベルのライフの誕生、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化、両方ともが実現できていないことを示す徵候でもあるのだから」

「——どうしたらしいのかしら」

「少なくとも明確なのは、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々を責めたり非難したり攻撃したりしている場合じゃないってことさ。もし、そんなことをしていたら、自身も Against Life 病を発症させていることになってしまい、その結果、『Against』の連鎖が果てしなく続いてしまいうのだから」

「そうね。すると、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の立場を守りながら Against Life 病の発症を『カラダ』の方向の方々へと広めないための方法、『Against』を連鎖させないための方法を見つけることが重要になるのね？」

「そうさ。さらには、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の病が治るためにサポートすることも重要になるはずさ。

つまりは、みんなを守るべく For All Life コースを貫き続けるような方法、For All Life コースを進むことを広めるような方法を見つけることが、必要条件になるのさ」

「そうね♪」

’19 初夏 (25年8ヶ月後)

結局——『カラダ』の方向の一般の方々が、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々のことを見守りながら、よく確かめ続け、よく考え続けるしかないのだろうか？

結局は、『カラダ』の方向の一般の方々次第なんだろうか？

『カラダ』の方向の一般の方々が、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が置かれたしがらみ、呪縛、やむをえなさ、がんじがらめさ…を察してあげながら、そういったことから解放されている可能性の高い『カラダ』の方向の一般の方々の間で、『For』を、For All Life コースを進むことを広め続けるしかないのだろうか？

たとえ専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々がヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥っていても、『カラダ』の方向の一般の方々が、ひたすら、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ち続け

ていればいいってことなのだろうか？ ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥っている専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、どんなに否定しようが、どんなに非難しようが関係なく、『カラダ』の方向の一般の方々が、ひたすら、肯定し、賞賛し、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を保ち続けていればいいのだろうか？

それとも、専門家やメディアの方々を含む『アタマ』の方向の方々の再生や向上に期待すべきなのだろうか？

それとも、専門家やメディアの方々を含む『アタマ』の方向の方々の再生や向上には、期待できないのだろうか？

’19 初夏 (1) (25年8ヶ月1週後)

「ねえ、どうして、今、こうなっちゃっているのかしら？」と瑠音。
「おそらく、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々が、
ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ…に陥っている
せいで“究極の再生可能エネルギーが十分に活用されると困る”と
受け止め続けているからだよ。

これは、Against Life 病の具体的な症状の1つであり、心笑君に
対して、よりによって『Against』のあり方が選ばれた理由の根幹
でもあつたらしい」と僕。

「そんな——。 ——ねえ、そもそも、どうして、“究極の再生可能
エネルギーが十分に活用されると困る”ことになるの？」

「1つは、歯止めが効かなくなるせいで、さまざまなレベルのライ
フの健康を損なうリスクがあるからだと思うよ」

「どういうこと？」

「例えば、食糧というエネルギー源が無限に存在して、いくらでも好きなだけ食べられるという場面を想像してみてほしいんだ」

「——」つばをごくりと飲み込む瑠音。「——食べすぎ、暴飲暴食を含めて歯止めが効かなくなって、そのせいで健康を害してしまうリスクがあるね」

「そうさ。“究極の再生可能エネルギー”も同じ。下手すれば、乱開発、乱造、乱獲、暴走、暴発…を含めて歯止めが効かなくなって、そのせいで、人間レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、地球生態系レベルのライフ…の健康を損なうリスクがあるんだよ」

「——でも、歯止めを効かせて、ほどよく食べ続ければ、ずうっと健康でいられるわ。食糧のことは、もうずっと誰も心配しないですむから、食べるためには働かなくてよくなる。そうなれば、別の大切なこと、有意義なことに時間やエネルギーを注げるようになるわ」

「そう。“無限の食糧”は、賢く上手に活用できれば、本来、これほどありがたい恵みはない。同様に、“究極の再生可能エネルギー”も、賢く上手に活用できれば、本来、これほどありがたい恵みはない。個人にとっても、すべてのレベルのライフにとっても——。『アタマ』の方向の方々にとっても、『カラダ』の方向の方々にとっても——。

つまり、“究極の再生可能エネルギー For All Life”なら、みんなが末永く幸せになれるのさ。“無限の食糧 For All Life”的ように」

「“無限の食糧”も、“究極の再生可能エネルギー”も、For All Lifeコースで活用できれば、みんなが喜べるのね。これで問題解決ね♪」

「ところがどっこい、それは、『アタマ』の方向の方々から見れば、まだ、非現実的なことなんだ」

「なんで？」

「『アタマ』の方向の方々にとって、『カラダ』の方向の多くの方々が、利己的で、ずるくて、感謝の気持ちを忘れて、衝動を抑制できないままに向こう見ずな愚かな行動をとっているように見えているから—— つまりは、『カラダ』の方向の方々が *Against Life* 病を発症しているように見えているから。

だから、『アタマ』の方向の方々にとって『カラダ』の方向の方々が“脅かす存在、不安にさせる存在”にしか見えない。だから、今の『アタマ』の方向の方々自身は、『カラダ』の方向のみんなが喜べば、逆に、脅かされた気持ち、不安な気持ちになってしまうんだよ」「ちょっと待って。それって、『アタマ』の方向の方々が、*Against Life* 病を発症してしまっているってことじゃない？ それに、そもそも、『アタマ』の方向の方々が勝手に自身を投影して、そう見えてるだけという可能性もあるのだから、まるまる、『アタマ』の方向の方々自身の責任である可能性もあるわよね？」

「そうだね。ただ、一方で、『カラダ』の方向の方々にとって、『アタマ』の方向の方々が、利己的で、ずるくて、感謝の気持ちを忘れて、衝動を抑制できないままに向こう見ずな愚かな行動をとっているように見えているというのもありえて、この場合、『カラダ』の方向の方々が勝手に自身を投影して、そう見えてるだけという可能性もあるのだから、お互い様なんだ」

「——結局、この場合、お互いに疑心暗鬼になっているせいで、おかしくなり続けているのね」

「そう。お互いの疑心暗鬼は、お互いに *Against Life* 病を発症させ

合い続けうる典型的なのさ。

だから、病が完治するためには、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、お互いに、どこまでも安心させる存在、お互いに、どこまでも守ってあげ合いたくなる存在、お互いに信頼し合える存在、お互いに協調し合える存在、お互いに感謝し合える存在になるべく、健やかに再生あるいは向上することが不可欠になるんだよ」

「それが実現すれば、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が、お互いに、“みんなが喜べば自身も一緒に喜べる存在”になれるのね？」

「その通りさ。——これも、大きな分岐点だよ。それが実現すれば、“究極の再生可能エネルギー”の十分な健やかな活用も実現するし、みんなが、エネルギーが空気のようにありふれていればいいって思えるようにもなるのだから。

だから、“究極の再生可能エネルギー”の十分な健やかな活用が実現できていることは、みんながみんな *Against Life* 病を克服できていることの象徴になんだよ。逆に、“究極の再生可能エネルギー”の十分な健やかな活用が実現できていないことは、*Against Life* 病が治っていないことの象徴で——」

「*Against Life* 病を克服できず、お互いに発症させ合い続けることは、本当に、もったいないことづくしの悲劇よね」

「そうだね。一般に *Against Life* 病の方々の症状には、相手の喜びを悲しんだり、相手の悲しみを喜んだりすることが含まれている。

だからこそ、一般に *Against Life* 病の方々は、周囲の方々に憎まれたり恨まれたり疎まれたりという形で周囲の方々に *Against Life* 病の発症を引き起こさせ、その結果、ますます自身の *Against*

Life 病が悪化するというように、どこまでも互いに連鎖的に発症させ合ったり悪化させ合ったりし続けてしまいう——」

「人の喜びも喜んで、好かれたり愛されたりすれば、せつかく、喜びが何十倍にも何百倍にも何千倍にも増幅するのに、やっぱり、もつたいなさすぎるわ。逆に、人の喜びを悲しみ、人の悲しみを喜ぶなんて、憎まれたり恨まれたり攻撃されたり…を含む受難のリスクを背負い続けることになってしまうのに——」

「もしかしたら、その受難のリスクをすでに抱えてしまっているせいで、恒常に自分の保身のことで精一杯になってしまい、ますますヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…に陥りながら、Against Life 病の症状が悪化し続けているという悪循環——受難のリスクを自分で増やし続けておきながら自身だけの生き残りのために必死にあえぎ続けるという悪循環が出来上がっている例は多いのかもしれない。

『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々の間で起きていることが、その一例であることも確からしいし——」

「『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々も、お互いに Against Life 病が治って、お互いに喜び合えて、みんな一緒に喜べたら最高なのに——」

「そうだね。『アタマ』の方向の方々と『カラダ』の方向の方々も、みんなが一緒に喜び合えるような“健やかな心への再生や向上”を、お互い達成できれば、“究極の再生可能エネルギー”を十分に健やかに活用できるし、健やかな全人類レベルのライフが誕生できるし、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たせるし、健やかな長寿命を満喫できるし、いいことずくめで最高なんだよ」

’19 初夏(2) (25年8ヶ月1週後)

「具体的に、どうしたら実現できるのかしら？」と瑠音。

「そのことを考えるためには、きっと、健やかな“頭脳と身体”をヒントにすることが役立つはずだよ。

今の全人類レベルのライフが病んでいる状態は、個体レベルのライフにおける頭脳——『アタマ』の方向の神経細胞社会レベルのライフの総和、すなわち、頭脳神経系レベルのライフが病みながら、なおかつ、『カラダ』の方向の細胞社会レベルのライフの総和も病んでいる状態、例えば、もう全然やせる必要がないのに、さらにやせようとして、体調を崩している状態と相似であると見なせる」「頭脳が過酷なダイエットを無理に身体に強要し続けてしまっているせいで、体調を損なっているような状態？」

「そう。この、頭脳の過剰な働きのせいで、体調がおかしくなり続けている状態は、個体レベルのライフにおける頭脳——『アタマ』の方向の神経細胞社会レベルのライフの総和すなわち頭脳神経系レベルのライフと、『カラダ』の方向の細胞社会レベルのライフの総和が、いわば互いに憎しみ合っている状態であるのさ」

「その両者が互いに愛し合う状態になって、病んでいる状態から脱却して、健やかな状態を取り戻すには、どうしたらいいのかしら？」

「健やかな心への再生や向上が実現すればいいのさ。そのためには、頭脳の働き方の調整、思考やイメージの調整…を含む『アタマ』の方向の“ライフのあり方”を改善することと、“ゆっくりゆったり深呼吸”——イキイキ息、保温・保湿、内外の環境の調整…を含む『カラダ』の方向の“ライフのあり方”を改善することの両方が役立つ。

つまり、頭脳と身体の両方すなわち『アタマ』&『カラダ』の両方の“ライフのあり方”を改善し続け、健やかな心への再生や向上を実現できれば——頭脳や身体が互いに労り合ったり、守り合ったり、保護し合ったりするような、『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが互いに愛し合う状態、健やかな“頭脳と身体”に至れるのさ」

「そうね。そのために、さらに具体的にどうすればいいの？」

「そのために次に欠かせない一步は、病んでいる言葉から健やかな言葉へと『コトバ』方面を再生・向上させることさ。

より具体的には、話し言葉を言い換えたり、独り言や内言を言い換えたり、メモや文書や書物の内容を書き換えたりしながら——例えば、“食べてはダメ。体重が増えては危険。もっとやせなければ大変なことになる。まだまだ太りすぎている。絶食しなきゃ体重管理できない”のような、冷たい言葉、強迫的な言葉、脅す言葉、ビクビク不安にさせる言葉、緊張させる言葉、暗いイメージ抱かせる言葉、ネガティブな思考をもたらす言葉、元気を奪う言葉…を含む病んでいる言葉から、“ほどよく食べて大丈夫だよ。ほどよい体重で健康的だよ。もうこれ以上やせなくて大丈夫だよ。やせすぎでも太りすぎでもなく丁度いいよ。絶食しなくても体重管理できるよ”という優しい言葉、ぬくもりのある言葉、愛情あふれる優しい言葉、ほつと安心させる言葉、リラックスさせる言葉、明るいイメージを抱かせる言葉、ポジティブな思考をもたらす言葉、元気になる言葉…を含む健やかな言葉へと『コトバ』方面を再生・向上させるのさ。

この一步、病んでいる言葉から健やかな言葉への『コトバ』方面的の再生・向上の達成は、過剰なダイエットにとって重要なだけでな

く、価値観、目標、アイデンティティ、信念、信条、信頼、信用、信仰…を含む、人生のあらゆる面の成熟で重要になるはずだよ。

病んでいる言葉から健やかな言葉への『コトバ』方面の再生・向上が達成されれば、そのおかげで、人生のあらゆる場面で、ゆがんだ信念や思い込みを改善したり、元気や好調を取り戻したりを含めて、いずれ『アタマ』と『カラダ』の両方のライフが実際に『カタチ』として、病んでいる Against All Life コースから健やかな For All Life コースへと移り、『アタマ』と『カラダ』の両方のライフの愛し合い、および、健やかな心への再生や向上につながるのだから」

「ええ、そうね」

「このように、『コトバ』の再生・向上が『カタチ』として、一人一人の健全な人間レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合い、および、健やかな心への再生・向上につながることは——いずれ、健やかな人間社会レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合い、健やかな生態系レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合い、健やかな全人類レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合い——健やかな全人類レベルのライフの誕生、健やかな天体生態系社会レベルのライフの『アタマ』や『カラダ』の両方の愛し合い——健やかな天体生態系社会レベルのライフへの一員化も、もたらすためにも重要になるはずさ。

もちろん、『カタチ』として、病んでいる Against All Life コースから健やかな For All Life コースへと移る一歩も重要だけれど——」
「そうね♪」

「そして、最終的に、『コトバ』と『カタチ』、『アタマ』と『カラダ』

のすべての面において、For All Life コースを貫けているかどうかは、一人一人が、健やかな心への再生・向上を実現できているかどうかを決める分岐点であるだけでなく—— あらゆるレベルにおいて、健やかに寿命を全うできるかどうか、人間レベルのライフや人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフが健やかに再生・向上できているかどうか、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生できるかどうか、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフへの一員化を果たせるかどうかを決める分岐点でもあり続ける」

「そうね！♪」

’19初夏(3) (25年8ヶ月1週後)

「健やかな言葉への『コトバ』方面の再生・向上を達成することを含めて、さまざまな面において For All Life コースを貫くために、1人1人が、ニュートン体験を通じて、そこから広がる壮大な可能性に、イキイキ、ウキウキ、ワクワクすることも役立つと思うよ。

自然のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づけば、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育みやすくなるはずだから。かつて、ニュートンの著作『プリンキピア』の登場が、まさに、その自然のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づくきっかけになつて、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育みやすくなつていたはずであるように——。

しかも、この極上のエンターテイメントをきっかけにして For All Life コースを貫ければ、ますます、この自然のパズル解きを通じた

新しい自然科学が十分に発展できるようになる」と僕。

「心笑君の成果を通じて自然のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づければ、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…をより育めて、おかげで、For All Life コースをより貫けるようになるだけではなく、その結果、新しい自然科学も十分に発展しうるのね？」と瑠音。

「その通り。しかも、心笑君の成果をきっかけにして、壮大な可能性の広がりにイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、For All Life コースをより貫けて、新しい自然科学が十分に発展できれば、人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフがより持続しやすくなるし、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生しやすくなるし、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしやすくなる」

「そつかあ。よかった。いいことずくめね」

’19初冬 (26年3ヶ月後)

さらに、僕は考え続けていた。

もし、新たな自然のパズル解きという極上のエンターテイメントのおかげで、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育むこと、For All Life コースを貫くことが増えてくれれば—— 高校の物理教師の方々も、大学の物理学の専門家の方々も、教科書を書いている方々も、出版している方々も、メディアの方々…も含めて、だれもが助かるだろう。イキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら新たな段階へと、みんなで進みや

すくなるのだから。

新たな段階へと、みんなで進むおかげで、“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life コースで健やかに普及できれば—— エネルギーを利用する方々だけでなく、エネルギーを提供する方々も助かるだろう。低成本で格安なエネルギーを供給することに目を向けられるようになるだけでなく、同時に、もっと利益を出せるって話になるのだから。

さらには、もし“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術が For All Life コースで健やかに使えるようになれば、例えば——

環境を浄化できるようになったり

淡水を、どこでも十分に確保できるようになったり

砂漠を緑地化できるようになったり

食糧を、どこでも十分に確保できるようになったり

寒冷な地域だろうと、乾燥地域だろうと、日照不足地域だろうと、どんな気候帯であろうとも関係なく、どこにおいても豊かな自然の恵みを十分に享受できるようになったり

大気の組成や温度をうまくコントロールできるようになったり

気候変動をうまくコントロールできるようになったり

石油や石炭の消費に伴う環境悪化への対処を不要にしたり

核燃料の消費に伴う環境悪化への対処を不要にしたり

生態系を十分に守れるようになったり

すべての人類が快適に暮らせるようになったり

燃料や食糧の奪い合いが不要になったり

...

これらを含めて、地球のすべての地を楽園化できることは元より、その楽園をコピーする技術によって、宇宙や他の天体にも健やかに

十分に進出できるようになることを含めて、いいことづくめになる。

つまり、もし、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育んで、For All Life コースを貫く方々を増やしながら“究極の再生可能エネルギー”に基づく新たな技術を For All Life コースで健やかに使えるようになることに貢献できていれば—— 生態系レベルのライフのため、生態系を構成する存在たちのため、人間社会レベルのライフのため、従来のエネルギー産業に従事する方々のため、消費者の方々のため、『アタマ』の方向の方々のため、『カラダ』の方向の方々のため、『イマ』の方向の方々のため、『ミライ』の方向の方々のため、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化のため…を含め、みんなのために役立っていることになる。

みんなが喜べるFor All Life コースの発展ならば、本物の発展だ！

確かに、新たに何かが誕生する際に、一部の方々に、痛みがもたらされる可能性がある。

出産の際に、身体の一部に痛みがもたらされたという意味においてだけでなく、過去において、新たな何かの誕生の際に、一部の方々に痛みがもたらされていたはずであるという意味においても——。

例えば、自動車や電車の誕生、電灯や LED 灯の誕生、冷蔵庫の誕生、CD や DVD の誕生、石油や天然ガスの利用の誕生、工場の機械作り家具の誕生…に伴って、人力車や馬車、ガス灯や提灯やろうそく、天然の氷、レコードやテープで生計を立てていた方の多く々、炭坑夫の方々の多く、建具職人の方々の多く…を含めて、一部の方々にとって、失業や生計の苦しさを含め、痛みとなっていたはずであるように——。

それでも、長い目で見て、それらの一部の方々がその仕事の大変

さから解放されることを含めて、みんなのため、全人類のためになつてている、“新たな業種の誕生 For All Life”であったからこそ、これらが実現し、定着したのではないだろうか？

だから、長い目で見て For All Life である新たな業種の誕生に対して、Against にならず、For All Life コースをとり続けてくださったこと——その新たな業種を一部の方々が痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったことに心底感謝するべきだろう。

同様に、新たな自然のパズル解きという極上のエンターテイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術についても、長い目で見て For All Life であっても、一部の方々にとっては、痛みとなる可能性がある。

それでも、もし、新たな自然のパズル解きという極上のエンターテイメント、究極の再生可能エネルギーに基づく新たな技術に対し、長い目で見て For All Life であると認識し、Against にならず、For All Life コースをとり続けてくださったなら——一部の方々が痛み回避だけのために、ボイコットしたり、阻止したりしないでくださったなら、そのことにも心底感謝するべきだろう。

’20 初春 (26年6ヶ月後)

もし、痛みを抱えざるをえない方々も含め、誰もがみんな、長い目で見て、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…を卒業して、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…で生きるようになり、For All Life コースを貫けるようになっていければ、いずれ、全人類レベルのライフの病は治り、健やかな全人類レベルのライフが誕生するだろう。

こうして誕生する健やかな全人類レベルのライフは、健やかに“究極の再生可能エネルギー”を使える存在として、地球生態系のレベルのライフの『アタマ』の方向の存在として活躍しながら、将来、健やかに寿命を全うできるようになっているだろう。そうなつていれば、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせ、ますます健やかに寿命を全うできるようになるだろう。

ここにたどり着ければ――

自然科学や科学技術の問題だけでなく、例えば、教育問題、医療問題、経済問題、人口問題、農業問題、食糧問題、紛争問題…を含む、あらゆる人間社会の問題も、ほぼ必然的に根底から解消していくだろうし、近年のSDGsを含むさまざまな目標も、より効果的に、より健やかに達成されているだろう。

’20初夏（26年9ヶ月後）

その日の晩、不思議な夢を見た。

「君が、これを考え出したのかい？」教授は、ぶるぶる震えていた。

「――いいえ、ほとんど井束心笑君です」と僕。

「これだ！ これだよ！ 探し求めていたのはこれだ！

この成果は、物理学に豊かな成熟をもたらします。

この成果は、エネルギー分野にも豊かな成熟をもたらします。

この究極の再生可能エネルギーが健全に活用されれば、エネルギー問題だけでなく、環境問題、水問題、食糧問題も劇的に解消されます。

気候問題さえも、劇的に解消されるでしょう。

奪い合うための争いもなくなる。

人類にとって、いいことずくめです。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

私が、生きている間に、このような成果をまのあたりにできて——
私は幸せ者です。みんなも幸せ者です。

この成果は、間違いなく、長い目で見て全人類のためになる。

全人類を笑顔するために役立てることができる——」

おじいさんが心笑んでいる。「うむ。大したもんじゃ」

ランプベリーがしっぽを振っている。

心笑君も心笑んでいる。「君の想いを込めて、それを世の中に
広めてみないかい？ 本という形で——」

「え？ 無理だよ。恥ずかしいし、目立ちたくないし、不安だし……」

「だったら、ペンネームにしようよ」と心笑君。

「ペンネーム？」

「そうだな。ペンネームは、“ココエ・サンポ”にしようか？」

「ココエ・サンポ？」

「そう。“ここへ散歩”という意味を持たせられるよ」

「待った、待った。ペンネームは、サンポ・ココエの方がいいんじゃない？ アイザック・ニュートンの名前やアルバート・AINシュタインの名前を見習えば、その方が、きっといいよ。君が先に見つけた成果だから」

「何言ってるんだい？ 君が先に見つけた成果だよ。

ココエ・サンポとなるべきさ」

「いや、ありえないよ。サンポ・ココエとなるべきさ。君が先さ」

「いーや。君が先さ」

「いーや。そんなことはないよ」

「そんなことはあるよ」

「ないない」

「あるある」

「——っていうか、そもそも、“ここへ散歩”や“散歩ここへ”よりも、“いつか、ここへ”や“いつも心笑み”的方が、はるかに意義深いんじゃない？」 そもそも案を僕は示した。

「“いつも心笑み”で“いつか、ここへ”——いいね♪」 心笑君の心笑み。パッと目を覚ました。しばし、ベッドの上で思いめぐらせた。

・・・ いつも心笑みで—— いつか、ここへ——。

いつも心笑んでいられれば、For All Life の境地に、いつでも戻ってこれて、いつも、ここからスタートできる。この“For All Life の境地から”が広まり、みんなに共有されれば、いつか、健やかな全人類レベルのライフに至る境地、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たす境地へ、いつか、ここへたどり着ける。

——でも、恥ずかしいんじゃない？ 不安じゃない？

心笑君のときと同じように、今度も、あらゆる非難がぶつけられる可能性がある。あるいは、大恥をかく可能性もある。

心笑君のように、さまざまな誤レッテルを理不尽に貼られる可能性もある。それらの誤レッテルを一般の方々に鵜呑みにされる可能性もある。 …

しかし—— いつか、ここへたどり着くために、誰かが、今すぐこれをやりとげなければならないんじゃない？

——いや、いつか、ここへたどり着くために、僕は、今すぐこれをやりとげたいんだ！！！ いつも心笑みで、いつか、ここへ！！！ イキイキしていよう。ウキウキしていよう。ワクワクしていよう。

まずは自分自身が、いつも心笑みながら、For All Life の境地から生き続けよう。みんなも、いつも心笑みながら、For All Life の境地から生きている未来を想像しながら——。

’20初秋（27年後）

「ダメよ。何も、あなたがそれをやる必要はないわ」と瑠音。

「そうだろうか？」と僕。

「——あなたがやらなくても、誰かがやってくれるわよ」

「誰かって、誰？」

「それは、はっきり、わからないけれど、どこかのヒーローとか、いつかのライフセイバーとか？ だから、それをやるのは、わざわざ、今ここにいる、あなたである必要はないわ」

「でも、それは、結局、“自分さえよければいい”という気持ちを持つてしまっているってことで、Against Life 病を発症していることを意味しているんじゃないだろうか？」

「——」

「そうやって発症して、誰もが——“どこかの誰かがやってくれるだろう、いつか誰かが救ってくれるだろう”と、知らず知らずにヘトヘトになって、知らず知らずにビクビクして、見て見ぬふりをしながら他人事にして自分だけを守り続けていたからこそ、自分の命を惜しみながら“みんなの命より自分の命”と、めみつちく生き続けていたからこそ、ここまでズルズルと、全人類レベルのライフの病が長引き続けているんじゃないだろうか？」

「——」

「かつて、天動説をよく確かめないまま鵜呑みにしていた学者や宗教家たちも、結局、保身しながら自分自身のライフを守っていたせいで、ズルズルと真実を犠牲にし続けていたわけだし」

「“自分のライフを大事にする”のは、きっと本能よ」

「確かに本能もあるかもしれない。でも、実は、本能よりも後天的な学習の方が、ずっと大きい理由なのではないだろうか？」

「——え？」

「小さい無知な頃は、恐れ知らずで、危険なことをしてしまう傾向があるのだから。例えば、道路に飛び出してみたり、高い所から飛び降りてみたり、熱いヤカンに手をふれてみたり、ボタン電池やボタン磁石を飲み込んでみたり…。」

このことは、“自分の命を大事にする”のは、本能よりも学習の方が大きい理由であることを意味しているんじゃないだろうか？」

「——そうね」

「それに、たった今、自分らが、ぬくぬくと、のほほんと生き続けているせいで、未来のみんなが犠牲にならないのだろうか？」

「未来のみんな——」

「そうさ。少なくとも、“未来のみんなの命より、今の自分だけの命を大事にし続けよう”をスローガンにし続けているような種だったら、早々と絶滅してしまっているはずだし——。」

例えば、子孫の誕生のために川を懸命に遡上する鮭たち——。

鮭たちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほほんと海を回遊し続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

例えば、子孫の誕生のために成虫となるセミたち——。

セミたちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほほんと幼虫のまま地中で暮らし続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

例えば、子孫の誕生のために命を振り絞りながら出産する人間の

母親たち、両親を始め命を削りながら、育児したり働いて育児を支えたりする人間の保護者たち——。

人間たちは、もし、ずっと自分だけの命を惜しがり続けて、のほほんと無計画に暮らし続けていたら、とっくの昔に絶滅している。

だから、種の存続のためには、“今の自分の命だけでなく、未来のみんなの命も”を、スローガンにすべきなんじやないだろうか？

ときには、ここぞというときのために自分の命をフルに輝かせ、自分の命をマックスに使うべき場面——使命を果たすべき場面もあつたりして——」

「そうね。ときには、自身の命をフルに発揮して——使命を果たして未来のみんなのためにも活躍すべきよ。

でも、それは、非常事態に限ったことで、平穏な日常の多くの時間は、向こう見ずに生きて自身を危険にさらすより、自身を大事にしながら生きている方が長生きできて、のちのち未来のみんなのためにも貢献しやくなるはずだわ」

「確かに、平穏な日常だったらそうだろうよ。のちのちの、ここぞいうときのために温存することも、ときに大事だよ。

しかし、もしかしたら、今すでに非常事態であり続けている可能性、今まさに“ここぞいうとき”である可能性は、ないのだろうか？単に麻痺して認識できなくなってしまっているだけで——」

「——え？」

「例えば、専門家やメディアを含む『アタマ』の方向の方々の心笑君に対する異常な反応は、今すでに非常事態であることを証明していないのだろうか？」

「それは——」

「ここで大事なことは、誰かを恨んだり非難したり攻撃したり…を開始して自身が **Against Life** 病を発症してしまわないことだよ。

そのためにも、**Against Life** 病の発症の蔓延、**Against Life** 病の症状の悪化させ合いこそが、このような事態を招いていることを、はつきり認識することが不可欠なんだ。

少なくとも、こういった認識が広まるきっかけを提供するためにも、今すでに、誰かが何かをやりとげるべき、ここぞという非常事態であり続いているのではないだろうか？」

「誰かって——」

「例えば、僕とか——」

「だから、ダメよ。心笑君のように、みんなに非難されて失職したりを含めて、もしものことがあったら、私たちが困るわ。私たちが悲しむ。——それに、**For All Life** コースが重要なんでしょ？」

自分自身や家族も大事にしなきゃ。無理して自分や家族が犠牲になるのは、正しくないわ。きっと。

——無理は禁物よ。あせらないで」

「——そういう態度も、結局は、ピクピクしながら **Against Life** 病を発症してしまっていることになるんじゃないだろうか？」

「——え？」

’20 秋 (27 年 1 ヶ月後)

たとえ疲れていても、たとえ不安であっても、たとえ自身が犠牲になっても、健やかな全人類レベルのライフの誕生のために、健や

かな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために、たった今から、この道を切り開いている必要があるのではなかろうか？

今すでに、たとえ命を削りながらでも、たとえ寿命を縮めながらでも使命を果たしているべき、いや使命を果たしたい、ここぞというときであるのではなかろうか？

手遅れになったら、どうしようもない。

Against Life 病の症状の悪化させ合いのせいで、早々と人類が絶滅したら、しゃれにならない。

そうなったら、悔やんでも悔やみきれないだろう。

ここにあるのは、もしかしたら、数百年数千年間の病んでいる Against All Life コースのせいで早々とライフが絶滅してしまうか、これから健やかな For All Life コースのおかげで、数万年、数十万年、数百万年、数千万年、数億万年…とライフをエンジョイし続けられるかの重大な分岐点であるのかもしれない。

最悪なのは、その怠慢さや臆病さのせいで、長い目で見て、未来のみんなが犠牲になることだ。

それに、長い人生において、大事な誰かを守るために、自分を犠牲にしなければならないときもあるんだ。これは、おじいちゃんの言葉でもあった。もし自分の命と引き換えに健やかな全人類レベルのライフが誕生し、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化が果たされるならば、安いもんだよ。

——確かに、できるだけ長生きしたいよ。体力の温存も大事だよ。

それでも、ここぞというときには、命を振り絞ったり、命を削ったり、寿命を縮めたりせざるをえないこともあるんだ。

未来のみんなのために——。

例えば、大震災の原発事故のとき、志願して、命を削りながら、

そこにとどまり続けて闘ってくださっていた方々の献身を絶対に忘れちゃいけない。

例えば、大震災のとき、使命感を抱いて、命を振り絞りながら、津波からの避難をサポートし続けてくださっていた方々の献身も絶対に忘れちゃいけない。

こういった方々は、未来のみんながどうなるかに、こだわり続けてくださっていたんだ。自身を輝かせながら——。

無謀な自己犠牲だって？ 自分を大事にしろって？

それでも、少なくとも、未来のみんなのためにになることを通じて、自分で自分自身の価値を認め続けていれば、ここにあるのは、決して *Against 『In』* ではなく、*For 『In』* だ。

少なくとも、誰よりも自分のことを知っている自分自身によって自分の価値を認め続けていることが、*For 『In』* の本来の意味であるはずだから。

その意味で、ここにあるのも、*For All Life* コースであるはずだ。

人は、遅かれ早かれ、いずれ死ぬということ——。

どうせ、いずれ死ぬのだったら、いっそのこと、未来のみんなのためにもなりながら、大いに輝きながら死ねばいいじゃないか？ 少なくとも自分自身で自分の価値を最大限に認め続けてあげながら。

だから、“死 *For All Life*”もありなんだよ。きっと。

——そうだよね？ おじいちゃん。

おじいさんの笑顔を心に思い浮かべた。

そうだよね？ 心笑君。

心笑君のレアではなくなっていた笑顔を心に思い浮かべただけでなく—— おじいさんからいただいた形見“AINSHUTAIN”を、かつて心笑君が握ってくれたように、目をつぶりながら握りしめた。

'21冬 (27年4ヶ月後)

ある人生のあり方へと飛び込む決意を固めた僕は、その決意を瑠音に伝えることにした。

「ええ！？」 瑠音は、ふるえていた。彼女の目に涙があふれ始めていた。「そんな、あんまりよ」

「健やかな全人類レベルのライフを誕生させるべく、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たすのを助けるべく、全人類レベルのライフの医者として、責任を全うしたいんだ。

心笑君の汚名を返上しながら——」

「——」

「——だから、別れよう」

「——」

「このままであれば、きっと君らにも迷惑をかけてしまう。きっと君らにも恥をかかせてしまう。きっと君らにも嫌な思いをさせてしまう。… 僕らが赤の他人だったら、それらのリスクが減る——」

「——」

「そりや、さびしいさ。一人になつちまうのは——。

それでも、君らに痛みを与えるよりは、ずっとましさ。それに、別の誰かに痛みを与えてしまう可能性もある以上、自分自身も痛みを受け入れるべきなのさ」

「ねえ、落ち着いてよ。どうして、そうなつちゃうの？

もちろん、みんなも大事。全人類も大事よ。

でも、家族も大事でしょ？ あなた自身も大事でしょ？」

「わかるよ。その通りだよ。

でも、非常事態には、未来のみんな——愛する存在、自分以上に大事な存在を守るために、たとえ自身を犠牲にしながらであっても、使命を果たす必要も出てくるんだよ。未来のみんな——愛する存在、自分以上に大事な存在を守るために、ときには、たとえ自身を犠牲にしてでも成し遂げるべきことがあるんだ——。

今、自分事にして本気で取りくんでいなきや、人類の早々とした滅亡を含めて、被害がさらに拡大するリスクがあるのだから。

だから、このまま放置しておくわけにはいかないんだよ。

ここにある病——*Against Life* 病は、何もせずに先送りにすればするほど、ますます症状を悪化させ合ってしまうような、そんな、たちの悪い性質を持っているんだよ」

「——」

「君が、命を振り絞って子どもたちを産んでくれたこと、とっても感謝しているよ。ぶっちゃけ、あのとき、“自分は、もう、いつ死んでもいいや”って思えるくらい、うれしかったんだ。あのとき、一瞬でも、そんな気持ちになれたのは、君のおかげだよ。

今度は、僕の番だよ。

僕にも、命を振り絞って達成したいこと—— ここぞというときのために命を使いたいこと—— 使命があつたってことなんだよ」

「——」

「そりやあ、僕だって、ぬくぬく長生きしたかったさ。

おだやかに、君らを見守り続けていたかったさ。

でも、もう見て見ぬ振りを続けているわけにはいかないんだ。

これは、今、やっていなきやならないことなんだ。

いや、これは、今、やっていたいことなんだ。

たとえ、それで自身の寿命が縮むことになっても——」

「——」

「もし改善されれば、長い目で見て、未来のみんなのためになつて
いるだけでなく、君たち自身のためにもなつてゐるはずさ。

——わかってほしい」

「——何、言ってるの？ 全然わからないわよ」

「瑠音——」

「こういうときにこそ、支え合うのが家族じゃない？

私、言ったよね。

誰が何と言つたって、ずっと味方だよって——。

いやよ。絶対別れない」

「瑠音——」

「私たちも、たとえ一緒に恥をかき続けることになつてもいい。た
とえ一緒に嫌な思いをし続けることになつてもいい。

だから、最後まで、ずっと一緒にいさせて——」

「——。 ——ありがとう、瑠音。でも、気持ちだけいただくよ。

君は、どうか子どもたちや君自身を守つてあげてほしい」

「私は、子どもたちも、あなたも、両方を守る」

「瑠音—— 瑠音は、瑠音自身と子どもたちを守つてほしい。

犠牲になるのは、僕一人で十分なさ。

でなきや、せっかくの僕の犠牲が無駄になつてしまうだろ？」

「あなたを犠牲になんかさせないわ」

「僕が、君らを犠牲にさせない」

それから、ふたりは、どちらともなく抱擁し合った。

そのまま、互いに泣き合いながら——。

いつまでも。 いつまでも。 いつまでも。

’21 初秋 (28年後)

結局、瑠音との関係については、結論が出ておらず、あいまいなままではあったけれど—— 心笑君を正統に評価する本として、“S. ITSUMO COCOE”のペンネームで、親友からの手紙をメインコンテンツにするという形式で、心笑君に捧げる本として、成果を公表した。

こうして、僕は飛び込んだのだ。すべてを覚悟しながら。

——最初の頃は、完全無視状態だった。

それでも、もしものことを考え、手紙を書いておくことにした。

音楽イン ♪感謝別れ Thank You, See You.

瑠音へ

この手紙を読んでいるということは、僕の予感が的中したということだね。

それは、とっても、ありがたいことです。

心笑君と僕の成果に、それなりに意味があったということになるのだからね。

確かに、見て見ぬふりしたまま、年を重ねて、ぬくぬく人生を全うするのも、よかったかもしれないね。確かに、そのような人生も魅力的で、それなりに価値があったのかもしれないね。

でも、僕は、はるかに、もっと価値のある人生を見つけました。

ヘトヘトに疲れ続けながら、ピクピクと不安を抱き続けながら、クヨクヨ悩みながら、ただ自分だけのために、今だけのために生きる人生よりも—— たとえ寿命が縮んでも、死ぬほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、未来のみんなのためにも、本気で貢献しようとしている人生の方が、はるかに大きな価値を持っていることを発見しました。

きっと、今の自分にとってだけでなく、10年後、100年後、1000年後、1万年後、10万年後、100万年後、1億年後…のみんなにとっても価値があるのだと——。

そうやって、そのことに価値を見出しながら、たった一度の人生を全うしようと決めたのです。

とにかく健やかな全人類レベルのライフが誕生してほしい。

そして、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしてほしい。

いつか、ここへ—— 地球人類もたどり着いてほしい。

病んでいる Against All Life コースから健やかな For All Life コースへと舵をとり続けながら—— “エネルギー保存則の例外”、 “究極の再生可能エネルギー” がもたらす恵みを、健やかに十分に活用し続けながら——。

そして、健やかな全人類レベルのライフとして、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員として、より長く持続して、健やかに天寿を全うしてほしい。

瑠音、君のおかげで、毎日、夢を見ているように幸せでした。

君の存在に、君の優しさ、君の愛に、感謝し尽くせないほど感謝しています。

子どもたちのこと、どうかよろしく頼みます。

子どもたちに伝えたいことは、ウェブの作品の中にすべて書いてあります。

どうか、君は、健やかに人生を全うしてほしい。幸せに生きぬいてほしい。

できたら、こんなバカが、この世に存在していたことを、明るく笑い飛ばしながら——。

心から愛しているよ。

これまでも、今も。

ありがとう、じゃあに。

夏岬さんぽ

音楽終了 ♪感謝別れ Thank You, See You.

’21 秋 (28年1ヶ月後)

「ねえ」 瑞音が、ふいに不安げな声を上げたのは、本屋さんに向けて、ふたりで歩いているときだった。「あやしいよ。うしろの“犬を連れている、お年寄りの方”」

帽子をかぶってサングラスをかけているお年寄りの方が、犬を連れて30mほど後ろを歩いているのが見える——。

「どうして、そう思うんだい？」と僕。

「だって、さっきから、ずっと私たちのあとをついてきている気がするから——」

「——気のせいではないかい？ 僕には、全然あやしく見えないよ。目の不自由な方が盲導犬を連れているように見えるよ。

「きっと、たまたまだよ」

「そうかしら——」

「——じゃあ、試しに、次の交差点で右に曲がってみようか」

「そうね」

右に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も右に曲がった。

「ほらほら」

「——じゃあ、今度は、左に曲がってみよう」

左に曲がってしばらく歩いて振り返ると、相手も左に曲がった。

「ほらほらほら！」

「ええ！？」

「ね？ そうでしょ？ ——私たち、尾行されているのかしら」

「——尾行！？」

そこで、僕は、念のため、ある提案をした。

「じゃあ、走ってみようか？」

「え？ —— そうね」

僕らは、走り始めた。

すると、なんと、その老人と犬も走り始めた。

「なんで！？」と僕の驚き。「キャー！」と瑠音の叫び。

何で、むこうも走るんだ！？

「ハア、ハア、ハア、ハア…」「ハア、ハア、ハア、ハア…」

何十メートル走っただろう？

しばらくすると、犬が解き放たれた。

！！！

犬だけが猛スピードで、近づき始めた。

20m、15m、10m…

「キャー！！」「うおー！」

！！！

あまりの驚きのせいで足がもつれて、うまく走れなくなつた。と思つたら、僕だけ、そのまま地面に転がり、寝そべつてしまつた。

5m、3m、1m…

「イヤアアー！！」「うおおおー！！」

僕に飛びついた、その犬は——

僕の顔を、ペロペロと、なめ始めた。

よく見ると、ランプベリーだった。

「ランプベリー！」と僕。

「ランプベリー！？」と瑠音。

しばらくすると、お年寄りの方^{かた}が、近くにたどり着いた。

帽子を取ってから、サングラスを取った。

岬のおじいさんだった。

「おじいちゃん！」

「おじいさま！」

「おう、応援しにきたぞ！ 久しぶりじゃのう。

——どうして、逃げるんじや？」

「っていうか—— まぎらわしいことしないでくれよ！！」

——パッと目を覚ました。しばらく呆然とした。

’21 秋 (28年2ヶ月後)

その後—— 意外にも、とことん笑われた。

嘲笑の的となって——。

中には、トンデモ理論家として笑う人もいた。

中には、21世紀最大級のジョークやユーモアだと笑う人もいた。

中には、お腹がよじらせ、涙をこぼすくらい笑う人もいた。

...

もう笑うしかないと、まともに相手にしない人が多かった。

多くの人は、大笑いして、本気で相手にしなかった。

何が、どこが、そんなに受けたの？

そりゃあ、笑顔を増やすことが自分の夢だったけれど——。

その意味では、夢が叶っているのかもしれないけれど——。

...

’21冬 (28年3ヶ月後)

しかし、その後の現実は、あのときの海のように過酷だった。

音楽イン ♪冬 Winter

専門家やメディアの方々からのすさまじい反発が始まった。

エネルギーの消滅の簡単な実証——“ココエのりんご”という根拠を完全に無視した“根拠のない誤科学”という誤レッテルが一方的に張られ、ケチョンケチョンに執拗にけなされ始めた。

さらには、成果と全く関係ない人格攻撃もなされ始めた。

恥ずかしがりやなのに“目立ちたがり屋の自己顕示欲の塊だ”と一方的に誤レッテルを貼られ始め—— 損失や犠牲を覚悟して大まじめにやっていたのに関わらず“素人が調子に乗ってふざけている”と一方的に誤レッテルを貼られ始め—— 健全な全人類レベルのライフを誕生させるために、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を助けるために、自然治癒力を引き出すべく心を再生・向上させようとする全人類レベルのライフの医者であろうとしていたのに関わらず、“落ちこぼれ医者だ”と一方的に——、——正しいレッテルも貼られ 始めた。

最後のレッテルは確かに正しいけれど—— ・・・。

いずれにしても、一般の方々は、専門家やメディアが伝える正しいレッテルだけでなく誤りのレッテルまでも、よく確かめようとしないままに鵜呑みにし、“流され”始めた。

そのような変化が積み重なり続けた結果、少なくとも S.ITSUMO COCOE は、社会的に完全に抹殺された。

この世では、Against Life 病の症状—— 今の自分の保身だけで精一杯のヘトヘト症状、裸の王様を“裸だ”と指摘できないビクビク症

状が、広く強固に蔓延し続けているということ——。

多くの人が、Against Life 病を、知らず知らずに発症し続け、知らず知らずに互いに悪化させ合い続けているということ——。

こんな僕なんかに、全人類レベルのライフの病を治すことなど、
どだい無理な話だったんだよ——。

もう、どうしようもないことだったんだよ——。

もう手遅れだったんだよ。

——潔くあきらめよう。その方が、よっぽど楽だよ。

...

それにしても、つまらない世の中だよ。

なんて、つまらない世の中なんだろう。

...

心笑君、ゴメンよ。ダメだったよ。甘かったよ。

自分には、無理だったんだよ。

落ちこぼれ医者は、しょせん、どこまでいっても落ちこぼれ医者
なんだよ。

...

音楽 ♪冬 Winter '21 冬 (28年3ヶ月2週後) に続く

'21 冬 (28年3ヶ月2週後)

絶望のどん底にまで沈み、ズタズタになり、仕事も手に着かなくなっていた僕は、冬至に近い日に急遽、無期限の休みをとり、帰郷する旨を書き記した置き手紙と、念のため、もしものために書いていたあの手紙の微修正版を遺して発ち、雪が積もっている中を歩き続け、なぜか冬の岬の、あの昼寝ポイントにまでたどり着いた。

早々と日が暮れ始め、薄暗くなり始めている——。

真冬の海原が重々しく広がっているのが見える——。

“ゆっくり、ゆったり深呼吸”——イキイキ息のおかげで、かろうじて持ちこたえていたけれど—— エネルギーを消耗しきったよう

に感じた僕は、力尽き、そのまま積雪の上で横になった。

雪の冷たさを感じながら、重苦しい雲を見上げた。

そのとき、猛烈な眠気に襲われた。

このまま眠ってしまおうか——。

僕は、ためらいながらも、とりあえず、そのまま目を閉じた。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

冬の岬の昼寝ポイントで横になって目を閉じている自分——。

雪の冷たさを全身に感じている自分——。

かと思うと、ほっぺに、ペロペロのぬくもりを感じた。

「——」 ランプベリー——。 目が開かない。

「確かに休養は大事じゃが、今この状況で眠るのは、よくないのでないじゃろうか？」

「——」 おじいちゃん——。 目が開かない。

「さんぽ君、起きて。起きるんだよ——」

「——」 心笑君——。

「君は、決して一人じゃないよ。もちろん、僕らも応援しているけれど、そもそも、僕らの成果も、僕らが知らなかつただけのことで、どこかの先輩方が、とっくの昔に見つけていたことだったのかもしれないんだよ。地球文明の中の誰かって意味においても、地球外文明の中の誰かって意味においても——」

「——」 ・・・ ——コンパースたちのこと？ 目を開けた僕。

「それに—— そもそも、究極の再生可能エネルギーは、電荷エネルギー や磁極エネルギーだけじゃないんだよ」

「——」 ？？？ 目を丸くした僕。

「心のエネルギーも再生するんだよ。何度も何度も——」

「心のエネルギーも再生する——」

「そう。心のエネルギーも、究極の再生可能エネルギーなんだよ。そのおかげで、僕は何度も何度も逆境を乗り越えることができていたんだ。そのときの希望の源の 1 つが、君であり、君らだった——」

「心笑君——」

「大丈夫。心のエネルギー——心エネルギーは、何度も何度も再生できて、くめどもくめども尽きないのだから。それは、僕が保証するよ。——というか、これは、まさに、君自身が、すでに示してくれていたことでもあったんだよ。喜びが何十倍にも何百倍にも増幅できることが、示唆してくれていたことなのだから——」

「何倍にも増幅できるからこそ、何度も何度も再生できる、くめどもくめども尽きない心エネルギー。——略して、再生可能心工？」

「ふふつ。君の自己実現は、このことを示唆してくれていたという意味においても、僕の自己実現の支えであったんだよ。むかしからずつと——。だから、本当の本当に、君には感謝しても感謝しきれないほど恩があるんだ——。

——だから、今は、もう眠らないんだよ」 心笑君の心笑み——。
 「その通りじゃ」 なぜかサンタクロースの恰好をしているおじいさんの心笑み——。トナカイのかぶり物をしている、しっぽを振りながら寄り添うランプベリーのぬくもり——。

——パッと目を覚ました。

しばし呆然——。

心笑君、何を言っているんだい。感謝してもしきれない恩があるのは、こちらの方じゃないか。君に出会えたことが、どんなにありがたかったことか——。どんなに—— …

——もちろん、それだけじゃない。おじいさんに出会えたことも、ランプベリーに出会えたことも、瑠音に出会えたことも、子どもたちに出会えたことも、どんなにありがたかったことか。…

それに、今こうして呼吸できていることも、今こうして手足からだのぬくもりを感じていられることも、今こうして心笑んでいられることも、どんなにありがたいことか。

つまりは、さまざまな出会いに恵まれながら、今こうして生きていられることができ、どんなにありがたいことか。どんなに—— …

——そうだよ。

ありがたき、心笑君のためにも——

ありがたき、おじいちゃんのためにも——

ありがたき、ランプベリーのためにも——

ありがたき、瑠音のためにも——

ありがたき、子どもたちのためにも——

ありがたき、未来の子どもたちのためにも——

ありがたき、未来のみんなのためにも——

ありがたき、今のみんなのためにも——

…

ありがたき、細胞社会レベルのライフのためにも——

ありがたき、人間社会レベルのライフのためにも——

ありがたき、全人類レベルのライフのためにも——

ありがたき、天体生態系社会レベルのライフのためにも——

そうやって、心のエネルギーを再生させ、増幅させ続けるんだ。

エネルギーを奪うクヨクヨではなく、エネルギーを増やすワクワクの方こそを膨らませながら——。

ワクワクワク♪ ワクワクワク♪
ワクワクワクワク ワクワクワク♪

あそれ♪
ワクワクワク♪ ワクワクワク♪
ワクワクワクワク ワクワクワク♪

あそれ♪
ワクワクワク♪ ワクワクワク♪
ワクワクワクワク ワクワクワク♪

——イキイキイキ♪ イキイキイキ♪
イキイキイキイキ イキイキイキ♪
——アイアイアイ♪ アイアイアイ♪
アイアイアイアイ アイアイアイ♪

——ランランラン♪ ランランラン♪
ランランランラン ランブルー♪

——ルンルンルン♪ ルンルンルン♪
ルンルンルンルン ルンルンルネ♪

——ニコニコニコ♪ ニコニコニコ♪
ニコニコニコニコ ニコニココエ♪
——サンサンサン♪ サンサンサン♪
サンサンサンサン サンサンクス♪
——ルンルンルネ♪ ルンルンルネ♪
ルンルンルネサン ルネサンクス♪

——ニコニココエ♪ ニコニココエ♪
 ニココエサンクス ココエサンクス♪
 ——ルネサンクス♪ ルネサンクス♪
 ルネサンクス♪ ルネサンクス♪
 ——サンクス♪ サンクス♪
 サンサンクス♪ サンクス♪

何度だって心の元気を取り戻せる。

そこには、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑み、喜び、快感、いい気持ち、好き、楽しみ、感謝…を含む『For』の生成がある。

イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑み、喜び、快感、いい気持ち、好き、楽しみ、感謝…を含む心のエネルギーは、いくらでも増幅できるし、何度だって再生できる。

夢の中の心笑君が言っていたように、それらは、たとえ何度逆境に直面しても、その都度乗り越えるために利用できる再生可能心エネルギーであり、究極の再生可能エネルギーの1つでもあるから。

元々、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、心笑み、喜び、快感、いい気持ち、好き、楽しみ、感謝…にあふれている健やかな存在であったならば、それは、確かに、心の再生だろう。

でも、例えば、元々、ヘトヘト、ピクピク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、悲しみ、苦痛、恨み…にあふれている病んでいる存在であったり、それまでに経験したことがないくらい、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ニコニコ、心笑み、喜び、快感、いい気持ち、好き、楽しみ、感謝…が生成したり増幅したりするならば、それは、正確には、心の再生ではなく、心の向上だろう。

心の再生や向上を実現するにはどうしたらいいのだろう？

そのためには、一人一人が好きなこと、楽しみなこと、感謝できること…を見つけて、心笑みを取り戻すことが有効だろう。

当然、好きなこと、楽しみなこと、感謝できること…の対象には、個人差があるだろう。

だから、基本的に、自由に対象を見つけて、心笑みを取り戻せばいい。もちろん、周囲と調和させながら——。

できるだけ周囲のみんなにも好かれながら。

できるだけ周囲のみんなにも楽しまれながら。

できるだけ周囲のみんなにも感謝されながら。

そうすれば、一人一人が『Against Life』コースを脱しながら、『For All Life』コースをとり続けることができるし、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ、ブンブン…の『Against』ライフを脱しながら、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…の『For』ライフを育て続けられるし、心の再生や向上を実現できる。

この心の再生や向上の実現が広がれば、人間レベルのライフの健康寿命が延びるだけでなく、人間社会レベルのライフの健康寿命も延びる。

心の再生や向上が広がり続ければ、いずれ、健やかな全人類レベルのライフも誕生するし、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化も果たせる。

そうなれば、科学技術を健やかに十分に育てることができて、地球環境の持続、地球生態系の繁栄に十分に貢献できて、地球人類は、地球生態系から重宝され続けるようになるだろう。

だから、心の再生や向上の実現が広まることが最優先なのだろう。

心の再生や向上が広まるには『For』の連鎖が広まることも重要

だろう。

心の再生や向上が広まるには、For All Life の知恵が広まること、For All Life の『コトバ』が広まることも重要だろう。

心の再生や向上が広まるには、『アタマ』と『カラダ』の両方の方々が For All Life コースをとりながら愛し合うことも重要だろう。人間レベルのライフにおいても、人間社会レベルのライフにおいても、将来の健やかな全人類レベルのライフにおいても…。

心の再生や向上が広まるには、“『イマ』と『ミライ』”の両方の方々が For All Life コースをとりながら愛し合うことも重要だろう。

心の再生や向上が広まるには、一人一人が、フルーツフルで健やかな自己実現 For All Life を果たし続けることも大事だろう。…

心の再生や向上が広まれば、たとえ一人一人のエネルギーは小さくとも、トータルで大きな力を生み出せるだろう。

この大きな力こそが、全人類レベルのライフにおける自然治癒力の根幹だろう。

この自然治癒力が大きくなれば、ますます心の再生や向上が広まり、心の再生や向上が広まれば、ますます自然治癒力が大きくなる——。

それらが十分に育てば、全人類レベルのライフは、健康を獲得でき、健やかな全人類レベルのライフが誕生するし、いつしか健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たせるんだ。

全人類レベルのライフは、いつか、ここへたどり着けるんだ。

ああ、たまらんぜ。

ああ、お楽しみ袋がふくらむぜ。…

そのためにも、まずは、自分自身が好きなこと、楽しみなこと、感謝できることを見つけ、心笑みを取り戻し続けよう。できるだけ

周囲のみんなにも好かれ、楽しまれ、感謝されるようにしながら——。

For All Life コースを貰きながら——。

そうして、まず自分自身が、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ピリピリ、イライラ、ムカムカ…を脱し続け、ウキウキ、イキイキ、ワクワク、ホワホワ、ニコニコ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…へと舵をとり続けよう。

何度も、何度も、何度も…。

そうしながら、日々、心の再生と向上を実現し続けよう。

何度逆境に直面しても。何度も、何度も…。

心のエネルギーも、究極の再生可能エネルギーだから。

——そうだよね？ 心笑君。

——そうだよね？ おじいちゃん。

——そうだよね？ 瑠音。

いつしか雪が降り始めていた。——とにかく早く帰らなきゃ。

よろよろと立ち上がった。すると、「あなた！」 大きな声が響いた。見ると、懐中電灯を持っている瑠音がそこに立っていた。

「よかった——」 瑠音の声は、ふるえていた。ぼろぼろと涙をこぼし続けている瑠音。僕は、駆け寄ると、思わず抱きしめた。

「ごめん。死んじゃったと思ったかい？」

「だって—— だって—— こんなに寒い中、眠ったりしたら——」

「考えごとをしていたんだよ。確かに最初は眠ってしまって夢を見たけれど、途中から、ずっと考えごとをしていたんだ。おかげで」

「バカ、バカ、バカ——」 瑠音は、僕の背中を、両手でポンポンたたいた—— あとに抱きしめ返した。

「——愛してる。愛してる。愛してる」 僕は、より強く抱きしめた。

’21冬 (28年3ヶ月2週1日後)

その翌日は、お昼頃まで、実家のベッドの上で横になっていた。

ふいに、フワリフワリと浮かぶコンパースの存在に気づいた。

「お久しぶりで、ございます♪」コンパースの第一声。

「おお、久しぶり——」

「ご一緒に、はるかなる旅にでかけませんかあ～♪」

「はるかなる旅?——」

「そうですともお♪」コンパースは、ひとまわり拡大して、僕がその上に乗るのを促した。

僕は、この際どうにでもなれと半ばやけくそで、素直にコンパースの上に四つん這いになった。

「しっかりとつかまっているのでございますよお♪」そう言うや否や、開いている窓から飛び出した。

「う～、わっ！！」

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

家の外に出たコンパースは、まもなく、上へ上へと上昇し始めた。

家が遠ざかる。公園も遠ざかる。森も遠ざかる。川も遠ざかる。

砂浜も、岬も、海も遠ざかる。陸地も、大洋も、雲々も遠ざかる。

さすがに不安になってきた。もし、ここから落ちたりしたら…

「いったい、いつまで昇り続けるんだい？——大丈夫？」

「大丈夫でございますよお♪」さらに遠ざかり続けるコンパース。

地球の丸みがどんどん増し続け、とうとう、まん丸い、美しい青くて白い地球全体が視覚に入った。

太陽を背にして見える、青く白い地球——。

息をのむような美しさだった。

音楽フェード・アウト♪ Soaring Up Into The Sky

体重がほぼ感じられなくなり、体がフワリフワリしている——。

落下する不安は消え失せた。でも、別の不安がよぎった。

「——あれ、空気は？ 僕の呼吸は？」

「大丈夫でございますよお♪」

「私たちもいるから大丈夫よ♪」 コンパリーチェの登場。合計2枚。

「コンパリーナもいるよ♪」 元コンパルンクルの登場。合計3枚。

「拙者もいるでごわす」 元コンパランクルの登場。合計4枚。

「私もいますからね♪」 元コンパリンクルの登場。合計5枚。

「オレもいるじえーい♪」 元コンパロンクルの登場。合計6枚。

「私もいますよ♪」 元コンパレンクルの登場。合計7枚。

7枚のペーパーコンパスが登場したかと思うとみんなが互いに部分的に重ね合わさり、僕を包み込んだ。美しい繭のように——。

その中で呼吸できると気づいて安心したのもつかのま、それは透明になり、再び、まん丸い地球のパノラマが広がった。 ???

地球のはるか上空で呆然としていると——

「はるかなる旅は、ここから始まるのですう～♪」 コンパースが声を響かせた。

音楽イン♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

「ええ！？」 僕の声も響いた。

さらに遠ざかると、太陽光に照らされている月が見えてきた。

地球と月と太陽から遠ざかり続けると、ほかの惑星たちも見えてきて、太陽系全体が視界に入った。

「太陽系だ——」 思わず、つぶやいた。

さらに太陽系から遠ざかると、太陽系が1つの輝く点として見え

るほどになった。

さらに遠ざかると、別の光る恒星がいくつか目に入った。

この1つ1つの輝く点が、それぞれに、いくつかの惑星を抱えているのだろう。太陽系のように——。

さらに遠ざかり続けると、どれが太陽系か全く見分けがつかなくなるほどの無数の輝く恒星が目に入るようになった。

「天の川——」

これらの無数の輝く星々の中の、たった1つが太陽系なのかあ。

さらに遠ざかると、銀河系全体が渦を巻いているのが見えた。

「すげえ。銀河系の渦だ——」

この巨大な渦の中の片隅に、あの太陽系があるのかあ。

さらに遠ざかり続けると、となりのアンドロメダ銀河が見えた。

かと思うと、複数の銀河の群れ——局所銀河群が見えた。

さらに遠ざかり続けると、無数の銀河群の集まり——超銀河団が見えた。

この時点で、銀河系は、すでに1つの輝く点にしか見えず、どれが銀河系なのかも見分けがつかなくなっていた。

「すごすぎる——」 この無数の輝く点の中の1つ1つが銀河系に匹敵する存在なのかあ。 …

それは、外の外の外…へと進み続ける旅だった。さらに遠ざかり続けると、巨大な泡のような宇宙の大規模構造が見えてきた。

さらに遠ざかり続けると、とうとう宇宙の大規模構造さえも小さな1つの輝く点に見えるほどの辺境の地、宇宙の果ての果ての果てまでたどり着いた。

その唯一の輝く点以外は、すべてが真っ暗闇だった。

「コンパース——」

「なんでございましょうか♪」

「さすがに遠ざかりすぎじゃない？ もし、このまま遠ざかり続けて、あの輝きが見えなくなったら、一体どうなるの？」

「そうでございますねえ♪ あらゆる方向がすべて、完全に真っ暗闇になってしまってございますう♪」

「完全に真っ暗闇？ そうなったら、どうなるの？」

「帰れなくなってしまうのですう♪」

「——ええ！？」 ・・・ 「帰れなくなったらどうなるの？♪」

「われわれは、永久に、この真っ暗闇の中で漂い続けるのですう♪
自由空間は果てしなく広がり、自由時間も限りなく延びるのでござりますう♪ 実際、時間の流れが永遠に止まってしまったかのようになってしまってござりますう♪」

「あの輝きを見失えば、使い切れないほどの自由時間、使い切れないほど自由空間を得られるってこと？」 ・・・ 「でも、そんなことをしたら、退屈で退屈でしかたなくなっちゃうじゃん」

「その通りなのでござりますう♪ ですので、今のところ、あの輝きが見える範囲にとどまり続けているのでござりますう♪」

「今のところ？」

「もし、あなた様が、お望みになるのならば、見失うこともできるのでござりますよお♪」

「そんな——。そんなこと、望むわけないじゃん——」

何なんだろう、この気持ち——。このモヤモヤした気持ち——。

しばらくの間、このモヤモヤした気持ちを整理し続けた。

はるか彼方の、あの輝きの一点の中の中の中の、さらなる中にあ
る銀河系の渦を構成する無数の恒星の中の1つである太陽の周りを
回っている惑星の中の1つの地球の上で、僕は暮らしていた。

さんざん、失敗して、イヤな思いをして、恥ずかしい思いをして、
傷ついて、つらくなって、悲しくなって、せつなくなって…。

ところが、今は、そんなしんどさが皆無な、はるか彼方の辺境の
場で、限りない自由空間と、限りない自由時間を手に入れることができ
そうになっている。

いっそのこと、何もかも、あらゆるしがらみから解放されて、こ
のままとどまり続けてしまおうか？

永遠の時間の中で——。どこまでも果てしない空間の中で——。
限りない自由の中で——。

——いや、待てよ。

退屈で退屈でしかたない永遠の自由時間、単調で単調でしかたな
い果てしない自由空間に意味や価値があるのだろうか？

・・・ ——そうすると、“有限の自由時間と有限の自由空間”と
引き換えに、僕らは、飽きることのない地球、つまらない地球じゃ
ない地球——“つまる”地球で生きていたってことなのだろうか？

バラエティに富む、おもしろさが“つまる”地球で——。

さまざまな喜びや楽しみが“つまる”地球で——。

いろいろな輝きが“つまる”地球で——。

… ——丸みを帯びた地球の輝き、瑠音と見た海面の輝き、ラン
プベリーと見た川面の輝き、おじいさんの相棒であった丸い石“ア

インシュタイン”の輝き、瑠音の瞳の輝き…が心に浮かんだ。

どれくらいの時間が経ったのだろう。コンパスの声が響いた。

「これから、どこへ行きたいでしょかあ？」

「——って、え？ どこへも行けるの？」

「どの銀河団へも、どの銀河へも、どの恒星系へも、どの惑星へも
…どこへでも行けるのですう♪

自由に選ぶことができるのでございますよお♪

今の地球より、はるかに平和で住みやすい快適な惑星、今の地球上より、はるかに大勢の心健やかな仲間が住んでいる場所、今の地球上より、はるかに寿命を増せる場所が、今までに無数にあるのでござりますよお♪」

「無数に——」 ···

「その中の1つで暮らせば、地球で暮らすより、はるかに快適に」

「地球へ帰りたい。——地球へ帰郷したい」

「なぜなのでございましょうかあ～♪」

「地球がわが家だから。地球がマイホームプラネットだからだよ。」

さらには、故郷の地球で生きている大好きな家族——僕の小さな家族はもちろん、地球というでっかな家で暮らす大きな1つの家族と一緒に、地球を、宇宙一健やかに暮らせる、宇宙一快適な場所にしたいからさ。みんなと一緒に力を合わせて、健やかな全人類レベルのライフを誕生させながら—— 健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしながら——。そうしながら、何億倍も何兆倍も、喜び、うれしさ、満足を増幅させ合ひながら——

「——ほういほういほうい～♪ かしこまりましたですう～♪」

それから、逆向きの旅、中の中の中…へ進む、帰郷の旅が始まった。

母なる宇宙の大規模構造。

母なる超銀河団。

母なる局所銀河群。

母なる銀河系の渦。

母なる太陽系。

母なる地球。

太陽を背にフワフワ浮かびながら、白と青に包まれた美しい地球、マイホームプラネット全体を眺められるポイントにたどり着いた。

コンパースらは、ここで、しばらく静止した—— かと思うと、色を取り戻し、^{まゆ}蘭の形を解いて、7枚に分離した。

しばし、それぞれ自由に動きまわった。

「ただいまですう～♪」「ただいまあ～♪」「ただいまだね♪」
「ただいまでごわす」「ただいまですね♪」「ただいまだじえーい♪」
「ただいまですよ♪」

それから、7枚は重ね合わさり1枚になった。僕がそれにつかまると、「それでは、参るでござりますう～♪」コンパースが降下を始めた。まもなく、僕は、四つん這いの姿勢を取り戻した。

それは、かつての悪夢と対照的であり—— “ココエのりんご”の新たな実証実験をしているかのような、ゆっくりゆっくりとした、静かな静かな降下だった。 ああ、いい夢を見ているようだよ。

雲、海、陸地… 岬、砂浜、森、川、公園、家々… そして、ついに実家、自分の部屋へと帰ってきた。

僕がコンパースから降りると、コンパースの声が響いた。「それ

では、そろそろ失礼いたしますですう♪」

「コンパース、いろいろ、ありがとう。それじゃあね」

「それでは、さよならですう♪」 「さようなら」

コンパースは、ふわりと窓を通過すると、見えなくなつた。

それから—— 僕は、思わずベッドの上にバタンと倒れこんだ。

しばし呆然——。どこまでが現実で、どこまでが夢だったのか——

もう、そんなことは、どうでもよくなつていた。

現実や実体験であろうと、夢や想像や思考であろうと…

——元々が何であろうとも、今、『アタマ』の方向にある“それ”から何かを学べることは確かだらう。

“それ”の正体が何であろうとも、もう関係ない。

広い広い宇宙の中に、せまいせまい地球が存在していること——。

長い長い宇宙の時間の流れにおいて、短い短い一人一人の人間の一生、それこそ“たまゆら”な一生が繰り広げられていること——。

これらは、ゆるぎない事実だ。

広大な宇宙空間に浮かぶ、極小なオアシスである地球を、互いに争い続ける場として浪費するなんて——

悠久の宇宙時間に刻まれる、極一瞬のきらめきである一生を、互いに争い続ける機会として浪費するなんて——

もったいない。もったいなさすぎるよ。

ありがたい、かけがえのない空間と時間は、悲しみ、苦しみ、不快さ、恨み…のために浪費するのではなく—— 喜び、楽しみ、気持ちよさ、好き、感謝…が、何十倍何百倍、いや、何千倍何万倍、何億倍何兆倍…にも増幅するためにこそ使ってみたいよ。

いつも、For All Life コースを貫いていたいよ。

いつも、だれもが、For All Life コースこそを貫いていてほしいよ。

For All Life の境地、いつも、ここから始めていれば—— 喜び、
楽しみ、気持ちよさ、快感、好き、感謝、心笑み、ニコニコ、元気、
活気、イキイキ、ウキウキ、ワクワク、ルンルン…を含めて、『For』
を増幅させることができる。

この『For』を増幅させることのできる“いつも For All Life の境地から”が広まり続ければ、健やかな全人類レベルのライフが誕生し、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化が果たされる境地へ、いつか、ここへ地球人類もたどり着ける。

『For』を増幅させることのできる

“いつも For All Life の境地から”——

が十分に広まれば、いつか、ここへたどり着ける！

『For』を増幅できる“いつも、ここから”——

が十分に広まれば、いつか、ここへたどり着ける！

『For』を増幅できる“いつも For All Life の境地から”が十分に広まれば——

いつか、健やかな全人類レベルのライフが誕生する境地——

いつか、健やかな天体生態系社会のライフの一員化を果たす境地

—— いつか、ここへたどり着けるんだ。

喜び、楽しみ、きもちよさ、快感、好き、感謝、心笑み、ニコニコ、元気、活気、イキイキ、ウキウキ、ホワホワ、ワクワク、ルンルン、いい気持ち、いい気分…を含む『For』を増幅できる“いつも For All Life の境地から”が十分に広まって、みんなに共有され続けられれば—— いつか、ここへたどり着けるんだ。

“いつも For All Life の境地から”が広まって、
健やかな全人類レベルのライフへ！

“いつも For All Life の境地から”が広まって、
健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化へ！

“いつも For All Life の境地から”が広まって、
いつか、ここへ！

喜びを限りなく増幅させながら——
楽しみを限りなく増幅させながら——
好きを限りなく増幅させながら——
快感を限りなく増幅させながら——
気持ちよさを限りなく増幅させながら——
いい気分を限りなく増幅させながら——
感謝を限りなく増幅させながら——
心笑みを限りなく増幅させながら——
ニコニコを限りなく増幅させながら——
元気・活気を限りなく増幅させながら——
イキイキを限りなく増幅させながら——
ウキウキを限りなく増幅させながら——
ルンルンを限りなく増幅させながら——
ワクワクを限りなく増幅させながら——
…
——やっぱり、ワクワク枠だぜ♪

それから何年も後の初夏(1)(何十年も後)

帰郷の際の散歩がてら、あの地球のかすかな丸みがわかる岬に久々に一人で来ていた。座りながら思った。 僕は、地球人だ——。

いや、それだけではない。僕は、宇宙人でもある——。

「わしゃあ、宇宙人じやからのお」 おじいちゃんは、そうとも話していたっけ——。

もちろん、“地球人だからいい”とか“宇宙人だからいい”とも、逆に、“地球人だからわるい”とか“宇宙人だからわるい”とも、そう単純には言えないだろう。

そうだ。一般に、“○○人だからいい”とも、“○○人だからわるい”とも、そう単純には、本来、決して言えないはずなのだ。

宇宙人や地球人を含む、あらゆる○○人は、○○人 For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For All Life の境地であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら共に繁栄しながら共に存続し合えるのだから。

逆に、○○人 Against All Life であり続ければ、宇宙人や地球人を含めて、あらゆる○○人は、あしき存在なのだ。Against All Life の境地であり続ければ、あらゆる存在は、憎み合い続けながら攻撃し合い続けながら、いずれ共に衰退しながら共に滅亡し合ってしまうのだから。

それは、単に人について言えることではない。人の『コトバ』の側面も、『コトバ』For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。人の『カタチ』の側面、『アタマ』の側面、『カラダ』の側面も、それぞれ、『カタチ』For All Life、『アタマ』For All Life、『カラダ』For All Life であり続ければこそ、よき存在なのだ。なぜなら、For

All Life の境地であり続ければこそ、あらゆる存在は、愛し合い続けながら感謝し合い続けながら長く共存し合えるのだから。

これらのことは、この宇宙の中の、あらゆる存在について、これまで例外なくあてはまってきた普遍的な事実だろう。また、これらのことは、この宇宙の中、あらゆる存在について、これからも例外なくあてはまってゆく普遍的な分岐点でもあるだろう。

For All Life の境地で健やかに生きる地球人 For All Life ならば、もはや、だれもが、マイホームプラネット——地球という家に暮らす、仲のいい家族のメンバーであるだろう。

つまり、この場合、地球という名の家天体で暮らしている健やかな地球人類は、もはや、仲のいい家族なのだろう。

地球という家天体で暮らすメンバーが仲のいい家族でありうるくらいならば、核家族、3世代家族…のメンバーが仲のいい家族でありうるだけでなく、学校や会社のメンバーも仲のいい家族、市区町村のメンバーも仲のいい家族、都道府県のメンバーも仲のいい家族、国家のメンバーも仲のいい家族、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカ…などの、それぞれの大陸や地域や島々のメンバーも仲のいい家族でありうるだろう。

そりや、仲のいい家族の中においてさえも、ときに、すれ違いや誤解、勘違いなどから、一時的にケンカ状態になることもある。それでも、仲のいい家族であればこそ、話し合ったり、謝り合ったり、許し合ったり、忘れ合ったり、軌道修正し合ったり、コース変更し合ったり、境地を変え合ったりして、仲良し状態に戻れて、長い目でみて、健やかに存続し続けられるのではないか？

それは、人体という名の家——家 人 体 で暮らしている細胞社会——組織、臓器、器官系…のメンバーが、仲のいい家族であれば

こそ、健やかに存続できることと同じではないか？

健やかな存続のためには、となりの人どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれることだけではなく、次のことも大事になるだろう。

となりの細胞どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの組織どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの臓器どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの器官系どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの学校どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの会社どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの町どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの村どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの市どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの都道府県どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの国どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの島どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの地域どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの大陸どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの天体どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの星どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること、

となりの銀河どうしが愛し合って、仲のいい家族が生まれること…

“となり”も、“家族”も、狭い意味から広い意味まで、対象範囲

が広がることは、せまい愛から広い愛へと愛が広がること、つまりは、For All Life コースそのものに対応しているだろう。

もちろん、だれかと愛し合うためには、まず、自分が自分自身を愛することが不可欠だ。

でも、自分自身だけを愛し続ける、いつまでも、それだけならば、

拙く幼く危険だ。

いずれは、自分自身だけでなく、自分の周囲をも愛すること、その愛を広めることができ、成熟であり、お互いの健やかな存続のために必要不可欠なのだ。

同様に、例えば、自分の国だけ、あるいは、自分の民族だけを愛し続ける、いつまでも、それだけならば、拙く幼く危険だ。

いずれは、自国だけでなく、自民族だけでもなく、自分の周囲の国、自分の周囲の民族をも愛するようになること、そのように愛を広めることができ、成熟であり、お互いの健やかな存続のために必要不可欠なのだ。

今、地球では、さまざまな国や民族に分かれていて、さまざまな〇〇人が、互いに争い合っているけれど、将来、国や民族を超えて仲のいい家族へとまとまり、地球人として、地球内で争い合うことがなくなり、地球内で平和を保ちながら、健やかに長く存続していくかどうかの分岐点は、それぞれが愛を広げ、互いに愛し合えるかどうか、つまりは、For All Life コースを貫けるかどうかだ。

この分岐点は、まさに健やかな全人類レベルのライフが誕生できるかどうかの分岐点もある。

それは人体とも相似であるという意味でも一理あるだろう。

細胞、組織、臓器、器官系の区域に分かれている健やかな人体には、それぞれの区域の存在が最大限に尊重されながらも、互いに愛し合って仲のいい家族へとまとまっているおかげで、人体内での平和、人体の健やかさを保っているという一面がある。これが成立しているのは、各種の器官系、臓器、組織、細胞が For All Life の境地であり続けているおかげだ。

例えば、核戦争を防ぐためには、国どうし、民族どうしが仲のよ

い家族になればいいって話になる。その目的を果たすための存在ならば、かつてAINシュタインが考えていた国を超えた政府も役立つだろう。超国政府 For All Life なら、大歓迎だろう。

とにもかくにも、あらゆる国どうし、あらゆる民族どうしが愛し合いながら仲のいい家族としてまとまれたなら、その暁には、地球上で、さまざまな内戦が消失し、地球平和が確立できる。その土台の上で、地球上で自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用できる。そうなれば、地球全体が“仲のいい家族のための楽園”になることができる。

それは、もし別の天体においてだれかが住んでいるとすれば、その別の天体においても同じだろう。

ほかの天体においても、あらゆる国どうし、あらゆる民族どうしが愛し合いながら仲のいい家族としてまとまれたなら、その暁には、内戦もなく平和を確立でき、その土台の上で、それぞれの場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用でき、それらの天体全体が“仲のいい家族のための楽園”になることができる。

天体と人体が相似だから—— あらゆる人体どうしが愛し合えるように、あらゆる天体どうしが愛し合いながら、あらゆる天体を含むこの宇宙の存在が、仲のいい家族としてまとまれたなら、内戦もなく平和を確立でき、その土台の上で、それぞれの場で、自然科学も十分に発達できて究極の再生可能エネルギーも健やかにフル活用でき、宇宙のあらゆる場所が“仲のいい家族のための楽園”になることができる。

それから何年も後の初夏（2）（何十年も後）

そういえば、コンパースは、この宇宙に無数に仲間がいるようなことも話していたっけ――。

――これって、宇宙にすでに無数に人類がいることを意味しているのだろうか？ もし本当にそうだとすれば、いろいろ、わかってくることがある――。

1つは、そもそも、何十億年もかけて、単純な物質→生体高分子→生体高分子社会→細胞→細胞社会→個体→個体社会→人間→人間社会…のような過程を経て、ある天体の中だけで人類が誕生したという説明は、宇宙で一番初めに誕生した人類だけに適用されるべき、ごくごく例外的な説明にすぎないはずだってことだ。つまりは、例えば、地球人が100%地球の中だけで原始生命からコツコツと誕生したという説明、この地球人類が宇宙で一番初めに誕生した人類だという説明には無理があって、その説明は非現実的であるってことになる。なぜなら、今、地球上に何十億人もいる中で、ある一人の人間が100%原始生命からコツコツと誕生したという説明、ある一人の人間が地球で一番初めに誕生した人間だという説明に無理があって、その説明が非現実であるのと同じことになるのだから――。

もう1つは、地球人類も親人類を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理がなく、現実的であるってことだ。なぜなら、地球上の各人間が親を含む多くの方々の力添えのおかげで誕生して育っているという説明の方が、無理がなく、現実的であるのと同じことになるのだから――。

――いや、もしかしたら、実は、地球人類は、まだ、赤ちゃんとして誕生さえしていなくて、子宮の中で育まれている胎児の状態にすぎない？ 健やかな全人類レベルのライフとして誕生していない

限り、地球人類は、流産するか、無事に誕生するかの瀬戸際に立ち続いているにすぎない？ だとすれば、親人類を含む多くの方々は、今にも、地球という名の子宮の中で、無事に育ってくれることを望み続けてくれている？ 今まさに、命を振り絞りながら——命を活かしながら、命を輝かせながら、命を満たしながら、誕生せんとしてくれている？

そうすると、この宇宙の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな全人類レベルのライフとして誕生することが、本物の宇宙デビューを意味している？ この地球の豊かな恵みを受けて愛されながら健やかな人間レベルのライフとして誕生することが、本物の地球デビューを意味しているように——。 …

いずれにせよ、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、この地球で人間社会レベルによって多様な新たな人間が誕生し続いているのと同じように、この宇宙で天体生態系社会レベルによって多様な新たな人類が誕生し続いているのは確かだろう。

だから、もし宇宙に本当にすでに無数に人類がいるのならば、その大部分は…先祖人類→親人類→人類→子人類→子孫人類→…の積み重ねの結果のおかげの存在だろう。地球上の何十億もの人間の大部分が…先祖人間→親人間→人間→子人間→子孫人間→…の積み重ねの結果のおかげの存在であるのと同じように——。 …

本当に、この宇宙に、すでに無数に人類がいるのだろうか？

それとも、そうではなく、地球人類は、宇宙で一番初めに誕生した、あるいは、誕生しようしている、唯一の人類なのだろうか？

いずれにしても、誕生した赤ちゃんが成長し、成熟し、将来、ときに新たな赤ちゃんを誕生させて親となりうるように、誕生し、成長し、成熟した地球人類は、将来、ときに赤ちゃん人類を誕生させ

て親人類となりうるだろう。

また、いずれにしても、将来、別の天体に新たな人類を健やかに育むためにも、健やかに寿命を全うするためにも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかな天体生態系社会のライフの一員化のためにも、For All Life コースを貫くこと、For All Life の境地であり続けることが重要であるのは変わりないだろう。

また、いずれにしても、誕生したこと、あるいは、誕生しつつあることが非常にありがたいことは、変わりないだろう。

その恵みに、その幸運に、心から感謝し続けたいよ。

それが、どんなに、ありがたいことか——。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

...

——ああ、なんだか少し眠たくなってきたかも。

それから何年も後の初夏(3)(何十年も後)

そう言えば、夢の中のランプベリー、おじいちゃん、心笑君は、生きているように感じられていたっけ——。

これらの夢の中の存在は、さすがに僕自身の『アタマ』の所産だろう。——それとも、みんな、それぞれのたましい魂とかと関連している?

いずれにしても、少なくとも、身体や物体が『カラダ』の方向にあるとすれば、夢と同様に、魂は『アタマ』の方向にあるだろう。

もしかしたら、『アタマ』の中の『タマ』は、“たましい”の中の“たま”と同じ起源を持っていたりする?

同じように、^{ことだま}^{みたま}言靈や御靈の中の“たま”も『アタマ』の中の『タマ』と同じ起源を持っていたりする？

だとすれば、『アタマ』は、どんな“たま”なのだろう？

そう言えば、おじいちゃんの形見“AINSHUTAIN”も、^{たま}玉だつた。って、それは、たまたま？ っていうか形靈を意味していた？

それとも、結局、あらゆる“たま”は、『アタマ』の働きの所産の一部に過ぎない？ 『タマ』が『アタマ』の一部であるように——。

というか、そもそも、“たましい”や“れい”を含む、あらゆる“たま”は、ある意味、『アタマ』の中の『アタマ』ではないか？

思考のあり方、知識のあり方、感情のあり方、行動のあり方、考え方、知り方、感じ方、動かし方、頭のあり方、身体のあり方、心のあり方…、つまり、人間のあり方を、意のままに決める存在という意味の要中の要——。

だから、“たましい”の中の“い”も“れい”の中の“い”も、実は、その本質は、“意”なんじゃないか？

だから、“たましい”や“れい”は、意識、意志、意欲、意思、意図、意向、意見、意味、本意…を含む、あらゆる“意”を担っており、いずれも、知や情のあり方、頭や心身のあり方、人間のあり方を決めている存在という意味の要中の要、『アタマ』の中の『アタマ』であり、つまりは人間レベルの3ステップスの一部なんじゃないか？

——もし人間のあり方を決める3ステップスの一部が“人間靈”であるならば、植物や動物のあり方を決める3ステップスの一部としての“植物靈”や“動物靈”、物質や宇宙のあり方を決める3ステップスの一部としての“物質靈”や“宇宙靈”もありってことになる？

——ところで、人間の“たましい”や“れい”は、“死後も生き残る”と言っている方もいるけれど、本当だろうか？

それが本当であろうとなかろうと関係ない。知や情、頭や心身のあり方を意のままに決めるを通じて、人間として現実に対して働きかけられる“今、生きている”という、この状態が、どんなに特別で、どんなにありがたくて、どんなに貴重であるか——。

この“たましい”や“れい”を含む“意”的力で、意のままに、頭や心身のあり方を決められるからこそ、Against Life → For All Lifeのような健やかな成熟が実現できるのだろう。

——Against Life → For All Lifeのような健やかな成熟が実現する際に、元気、活気、気持ちよさ、いい気分…を含めて、『For』が增幅できるんだっけ——。

あっ、意と気って、どこか似ている？

“意”と“気”的関係って、どうなっている？

——あ！ “意”が『アタマ』の方向にあるならば、“気”が『カラダ』の方向にあるじゃん！

ア行とカ行が、ぴったり調和しているし——。

って、これも、たまたま？

気には、元気、活気、気持ちよさ、いい気分… 『カラダ』以外にも、気力、気合、やる気、雰囲気、景気…も含まれる。

好きも、実は、“素気”^{すき}だったりする？ イキイキ、ウキウキのキも実は気の一種？ いずれにしても、“気”は、『For』の一種で增幅するし、“意”と同様に3ステップスの一部を担っている——。

それにしても、“意”が頭や心身のあり方を決めるってことは、同時に、“意”が“気”的あり方を決めるってことでもあるだろう。

意が気のあり方を決める際の要が呼吸——息、イキであることを思い出せば—— 気を意のままにすることが、“意気する”ってことで、ほとんど、息することに等しい？

『アタマ』

意

気

『カラダ』

いや、そもそも、気を意のままにすることは、“意気る”ことであり、まさに、生きることに等しい？

あるいは、そもそも、気を意のままにすることは、“意気意氣する”ことであり、イキイキすることに等しい？

って、これらも、たまたま？ それとも、深い関連がある？

いずれにせよ、息によって、気を意のままにできるだけでなく——
気を意のままにすれば、気持ちよく息ができる。

気を意のままにすれば、元気にもなれるし、好きにもなれる。

気を意のままにすれば、意気込み、心意気、意気投合…を育むこともできるし、意気消沈から回復することもできる。

気を意のままにすれば、イキイキすることもできる。

気を意のままにすれば、より生きることもできる。

気を意のままにすれば、よりよく生きることもできる。

気を意のままにすれば、Against Life → For All Life のような健やかな成熟も実現できる。

それほど、“気を意のままにすること”は、重要だろう。

…

それにしても、死んでしまうことは、気だけを失うってこと？

もし、死んで意識を失うなら——気を失うならば、気とともに意も同時に失わざるをえない？ いや、失うのは気だけであって、意だけが生き続けることになる？ でも、気を意のままにすることが、生きることであれば—— 意だけが生きる——“意気る”ってことは、矛盾していく、ありえないことになる？

それとも、死んで気を失った場合—— 意だけが生き残ることはありえなくとも、意だけが存続することはありうる？

つまり、生き残る ≠ 存続するってこと？

意だけが存続するって、どういうこと？

意だけが存続するなんて、本当は、ありえない？

意だけが存続することは、本当は、ありうる？

・・・ —そもそも、いのちって言葉には、意後の意味——後
に意となる存在の意味——期待が込められている？ ——命→意？
それとも、意の後の存在が、いのち？ ——意→命？
…

いずれにしても、やっぱり、気のあり方を意のままに決めることを通じて、気を意のままにすることを通じて、人間として現実に対して働きかけられる“今、生きている”この状態、命を活かせる状態、命を輝かせられる状態、命を満たせる状態が、どんなに特別で、どんなにありがたくて、どんなに貴重であるか——。

また、いずれにしても、結局は、For All Life コースを貫くこと、For All Life の境地であり続けることが、どんなに重要であるかは変わりないだろう。

それらは、すでに亡くなられた方々のためにもなるだろう。

・・・ —いや、ちがう？

すでに亡くなられた方々は、死んでしまった自身のためはいいから、今の方々が生きるため、未来の方々が生きるために、今の方々に生きてほしがっている？ そうやって、ライフをリレーし続けてほしがっている？

いずれにしても、過去のすべての方々のライフのおかげ、今のすべての方々のライフのおかげで、なおかつ、今のすべての方々のライフのため、未来のすべての方々のライフのために—— その意味を込めて For All Life コースを貫くこと、For All Life の境地であり続けることも、健やかな全人類レベルのライフの誕生のため、健や

かな天体生態系社会レベルのライフの一員化のために重要だろう。

また、いずれにしても、この人間社会、人類が誕生し、今生きているのは、すでに亡くなられてしまった多くの方々が For All Life コースを貫き、For All Life の境地であり続けていてくださったおかげもあるはずだ。

やっぱり、心から感謝したいよ。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

...

そして、やっぱり——

For All Life ! いつも、ここから—— いつか、ここへ !

For All Life ! いつも、ここから—— いつか、ここへ !

For All Life ! いつも、ここから—— いつか、ここへ !

...

——ああ、すっかり眠たくなってきたよ。

いったん、お昼寝でもしようか。

横になった。

でっかな青空が広がっている。白い雲が浮かんでいる。

さわやかな潮風が全身をなでている。

それから目を閉じた。

ゆっくり、ゆったり深呼吸しながら—— 心笑みながら——

かつてのおじいちゃんのように——。

まどろみの中で、替え歌を作っちゃったりもしながら——。

作曲 初果ひるね 作詩 おじいちゃんひるねさんぽここえ——。

タイトル『Joy of Life』——『生歡喜』？

ドコドコドコトバ♪ コココココココロ♪ イマイマイアタマ♪
ポカポカポカラダ♪ ホワホワホワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

アイアイアイデア♪ ワクワクワクフウ♪ ニコニコニココエ♪
イキイキイキモチ♪ ソワソワソワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

ウキウキウキボウ♪ ユウユウユウボウ♪ アイアイアイボウ♪
ラブラブララボー♪ ウワウワウワハハッ♪

ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

いつも、ここから♪ いつか、ここへ♪ ついに、ここに♪
ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

For All Life♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪
ピーピピー♪

All Life For♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪
ピーピピー♪

アイアイ、アイアイアイ♪ ワクワク、ワクワクワク♪
イキイキ、イキイキイキ♪ ニコニコ、ニコニコニココエ♪
ルンルン、ルンルンルネ♪ サンサン、サンサンサンクス♪

For All Life♪ All Life Forever♪

...

ありがたいやき、おめでたいやき、 ここえみたいやきミライのいつか

人類のあらゆる営みが、For All Life のあり方を保ち続けるような時代になってから、ずいぶん長い時間が経過している——。

エネルギー産業 For All Life、事業 For All Life、
農業 For All Life、工業 For All Life、サービス業 For All Life、
商売 For All Life、貿易 For All Life、
消費 For All Life、家事 For All Life、家庭生活 For All Life、
政治 For All Life、政策 For All Life、
法律 For All Life、裁判 For All Life、
教育 For All Life、学習 For All Life、学問 For All Life、
哲学 For All Life、知愛 For All Life、
宗教 For All Life、伝統 For All Life、習慣 For All Life、
創作 For All Life、創造 For All Life、自己実現 For All Life、
想像 For All Life、空想 For All Life、趣味 For All Life、
レジャー For All Life、エンターテイメント For All Life、
文学 For All Life、文芸 For All Life、文化 For All Life、
フィクション For All Life、ノンフィクション For All Life、
メディア For All Life、
科学技術 For All Life、
医療 For All Life、健康保護 For All Life、環境保護 For All Life、
治安 For All Life、安全 For All Life、安心 For All Life、
企業 For All Life、経営 For All Life、経済活動 For All Life、
投資 For All Life、銀行 For All Life、寄付 For All Life、
ボランティア For All Life、ライフワーク For All Life
...

健やかな全人類レベルのライフが誕生してからも、久しくなっている——。

協力関係、シナジー関係、『Love - Love の関係』…が増え続け、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員となり、本物の平和が訪れてからも、久しくなっている——。

健やかさ——楽しみ、ユーモア、恵み、心笑み、イキイキ、ニコニコ、ワクワク…を増やし続けながら、病みつぶり——疲労、疲弊、不安、強迫、脅迫、脅威、毒、欠乏、貧困、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…を減らし続けながら、『アタマ』と『カラダ』の両方において、健全な持続可能な世の中が実現し続けている——。

全人類レベルのライフは、究極の再生可能エネルギーの恩恵を受けながら、ますます健やかに暮らし続けている——。

食糧問題、燃料問題を含むエネルギー問題も、すかっと解消され続けている——。

資源の奪い合い、パイ取り合戦、紛争も、すっかり解消され続けている——。

各種の気候帯の間の自然の恵みの格差も、全く解消されている——。

水不足、砂漠化、気候変動、環境汚染、生態系破壊…を含む環境問題も、きちっと解決され続けている——。

自然治癒力も重視されながら、人口問題を含む医療問題の多くも、しっかりと解消され続けている——。

十分に成熟した自然科学も、みんなに共有されながら、みんなのために、有効活用され続けている——。

…

音楽イン ♪夏 Summer ミライのいつかのある日その1へ続く

ありがたいやき、おめでたいやき、 ここえみたいやきミライの いつかのある日その1

とある学校（～12歳）の夏の授業風景——。

「今日は、エネルギーが消滅することを確かめる実験をします。

みなさん、高いところから物体が落ちている間に、物体の速さが増すことを知っていますね？」

「はーい♪」

「それでは、この、高いところから落ちている間に速さが増すことによって、物体が獲得するエネルギー、詳しくは運動エネルギーによって、物体が床に落ちたときに何が起こるかについて、具体例を挙げて説明してみてください」

「——高い所から床に落ちたボールは、弾みます」

「そうですね。高い所から床に落ちたボールは、弾みますね。

ほかには、ありますか？」

「高い所から床に落ちた卵は、べちゃっと割れてしまします」

「泥だんごも、べちゃっとつぶれてしまうわ」

「雪玉も、べちゃっとつぶれてしまうよ」

「そうですね。高い所から床に落ちた、卵や泥だんご、雪玉は、べちゃっとつぶれますね。ほかには、ありますか？」

「——高いところから床に落ちた陶器やガラスのお皿は、大きな音を立てて、割れてしまいます」

「その通りですね」

「プラスチックや金属のお皿ならば、大きな音が出て弾むだけだよ」

「そうですね。ほかにはないですか？」

「カスタネットやタンバリンならば、弾んで楽器の音が鳴るわ」

「その通りですね。ほかにも、まだまだ、たくさんあると思います。

高いところから床へと物体が落ちると、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…します。

それでは、高いところから床へと物体が落ちた際に、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…するためのエネルギー源は何でしょうか？」

「高い所から落ちている間に物体が獲得する運動エネルギーです」

「大正解です」

「先生、自分で、最初に正解を話していたじゃん」

「フフフ。そうでしたね。

つまり、高い所から床まで落ちている間に物体が獲得した運動エネルギーが、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…の変化を引き起こすためのエネルギー源になったのです。

それでは、次に、物体をそつと床に下ろすことを考えてみましょう。例えば、ポールをそつと床に下ろしたら、どうなりますか？」

「弾みませんし、音を出しません」

「そうですね。卵をそつと床に下ろしたらどうなりますか？」

「卵は割れませんし、丸い形のままです」

「その通りですね。泥だんごや雪玉は、どうですか？」

「泥だんごや雪玉は割れず、そのまま丸い形のままです」

「そうですね。お皿は、どうですか？」

「割れませんし、弾みませんし、音を出しません」

「カスタネットやタンバリンは、どうでしょうか？」

「音を出しません。静かなままです」

「それでは、物体をそつと床に下ろしたときは、なぜ、そうならず、そのままになるのでしょうか？」

さきほどの、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…するためのエネルギー源、運動エネルギーが、どうなったからでしょうか？」

「そんなの簡単だよ。運動エネルギーが消滅したからだよ」「エネルギーの消滅は、常識中の常識だわ」…

「そうですね。よく知られているように、運動エネルギーが消滅したからです。

今、みなさんは、エネルギーが消滅しうることを、あたりまえの常識として知っています。

しかし、過去に、何百年もの間、“エネルギーは消滅しない。エネルギーは永久不滅である”と、心底思い込み続けていた時代が、人類にはありました。

かつて、あらゆる物理学の教授や教師も含めて、ほとんどの人間が、エネルギーは永久不滅だと思い込んでいたのです」

「先生、どうして、そんなに、おバカさんだったのですか？」

「これこれ、おバカさんなんて決して言ってはなりませんよ。逆に利口すぎたのかもしれないのですから。

当時の人類にとって、エネルギーの永久不滅こそが、最新最高の自然科学の基礎だったのです。例外のないエネルギー保存則は、当時、あらゆる教科書に印刷され、あらゆる教師が教え、あらゆる生

徒・学生が学んで身につけていた常識だったのです。当時、あらゆる学者が、この例外のないエネルギー保存則を常識にしながら学問を育んでいました。当時は、老若男女、ほとんど誰もが、心の底から、例外のないエネルギー保存則が最も普遍的な真理だと思い込んでいたのです。当時、人類最高の頭脳を持っていると崇められていたAINシュタインという物理学者も例外ではありませんでした」

「それなのに、どうして、人類は、エネルギーが消滅しうることに気づくことができたのですか？」

「それは、ココエのおかげです。ココエが、初めて、はつきりとエネルギーが消滅しうることを体系的に示したおかげだったのです」

「知ってる、知ってる。ココエのりんごだろ？」 「有名だわよね」

「そうですね。万有引力の法則がニュートンのりんごならば、エネルギーの消滅はココエのりんごですね。

ココエは、考えごとに没頭しているときに、手に持っていた大好きなりんごを、思わず落としてしまったのです。

りんごは、床に落ちてしまい大きな音を立てました。

ココエは、そのりんごを拾い上げると、大好きなりんごの傷つきよう、へこみようを見て、嘆きました。

でも、そのあと、ココエは、ピンときたのです。

高い所から落としたりんごは、傷ついたり、へこんだり、音を立てたりする。しかし、そうっと下ろしたりんごは、傷つかないし、へこまないし、音を立てない。これは、いったいなぜなのか？

ココエは、その疑問を、とことん、つきつめ続けました。そのような思索の結果生まれた成果が、当時の常識を覆していた“エネル

ギーの消滅”の発見であり、そのことが、彼が育んでいた新しい物理學を支えることになりました」

「おもしろい♪」「おもしろいね♪」

「おもしろいですね。

ニュートンは、木から落下するりんごをヒントにして、万有引力の法則を発見したと言い伝えられています。

ココエは、手元から落としてしまったりんごをヒントにして、エネルギーの消滅を発見したと言い伝えられています。

さあ、みなさんも、りんごから何か新しい発見ができるかもしれませんよ。チャレンジしてみてくださいね♪」

「ハイ♪」

音楽終了♪夏 Summer

ありがたいやき、おめでたいやき、
ここえみたいやきミライの
いつかのある日その2

とある学校（～15歳）の秋の授業風景――。

音楽イン♪秋 Autumn

「みんなも知っているように―― かつて、エネルギーは永久不滅であり、生成も消滅もしないと心底信じていた人が大多数だった時代が300年以上も続いたんだ。当時、最も有名で偉大だった物理学者の一人、AINシュタインまでも心底信じきっていたほどだった。

このエネルギーの永久不滅の原理を土台にする例外のないエネルギー保存則は、当時の最新最高の科学の1つ、一般相対性理論を育む支えになったことを含め、ある程度は確かに役立っていた。

しかし、そのせいで、物理学という学問は迷路にはまり、その進歩が妨げられ、人類は、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかり続けることになった——」

「300年も、例外のないエネルギー保存則を信じていた人々が、ほとんどだった時代があるなんて信じられないよ」 「例外のないエネルギー保存則のせいで、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかっていたなんて、当時の人々は、なんて愚かだったんだろう」

「こらこら、決して愚かなんて言つてはいけないよ。彼らには、何らかの理由があつて、そうしていた可能性があるのだから。

——みんなは、どうして、こうなつっていたと思うだろうか？」

「人は流されやすいからよ」 「自分を守るために同調するからさ」

「不安だったからだわ」 「疲れていたからよ」 「何となくさ」

「地球中心が好きだったように、永久不滅が好きだったからよ」

「心の自由を持っていなかつたからじゃないか」 …

「そうだね。どれも原因として考えられる」

「先生は、どのように考えておられるのですか？」

「先生は、当時の学者自身を含む、多くの方々の心が、ビクビク、ヘトヘト、クヨクヨ、モンモン、ムカムカ、ブンブン…と病んでしまっていたからという視点は、どうしても外せないと考えている。

——でも、そんな300年以上も続いた、心が病んでいる時代の中で、ココエという名の学者が、ひょっこりと登場した。

自然知愛 For All Life をひつさげながら——。

究極の再生可能エネルギーの健やかな利用こそを広めながら——。

それまで、300年以上もの間、人類は、エネルギーの永久不滅を、みんなして受け入れ続けていたんだ。

その間、誰も、裸の王様が裸だとは言えなかつたんだ。

当時の、最も優秀で、最も疑り深かつた物理学者の一人AINSHULTAINでさえも、裸だと言えなかつたほどに——。

でも、自然知愛 For All Life に基づいた、ココエのりんごを含むココエの成果がきっかけとなって、人類は、例外のないエネルギー保存則という古い常識、幻想的な常識を覆すことができた。

最初の頃、支持する人は、ごく少数だけだった。

それでも、少しずつ少しずつ増え続けたんだ。

研究ポストについていない無給のボランティア学者も、研究ポストについている有給の学者も関係なかつた。自然知愛 For All Life への共感、“ココエ体験”の満喫を伴いながら—— この真実への支持は、広まり続けた。

数人が支持し、数十人が支持し、数百人が支持し、数千人が支持し、数万人が支持し…そんなふうにして真実への支持が指数関数的に広まり続け、いつしか、エネルギーの非永久不滅性、エネルギー保存則の例外は、人類にとっての新しい常識となつた。

300年以上かけて、ついに「永久不滅のエネルギー、例外のないエネルギー保存則」の呪縛も解かれると同時に、全人類は、ついに、究極の再生可能エネルギーの十分な活用に、健やかに取り組めるようになつた。

おかげで、全人類は、さらなる飛躍を遂げることができた。

地球環境や地球生態系、全人類の営みを支えるためのエネルギー

源として、環境に優しい究極の再生可能エネルギーを上手に活用しながら、全人類は、ますます住み良くなつた地球上で、ますます快適さを増やし続けた。

エネルギー不足問題もなくなった。

食糧不足問題もなくなった。水不足問題もなくなった。

多様な気候帯の間の自然の恵みの格差もなくなった。

気候変動を自在にコントロールできるようになつた。

天体の地球落下の予防も、より簡単に可能になつた。

これらのことは、健やかに地球上で暮らしていくことだけでなく、健やかに別の天体へ進出することも助けた。

誰もが心豊かになつた。自由時間が増えた。余暇が増えた。

誰もが自分の才能をイキイキと開花させる、健やかな自己実現社会が到來した。

楽しみが増えた。喜びが増えた。安らぎが増えた。

健康が増えた。笑顔が増えた。心笑みが増えた。…

そして、現在がある。

それは、みんな一人一人の心の再生や向上のおかげ——

それは、一人一人の、クヨクヨ、ビクビク、オドオド、ウツウツ、モンモン、ヘトヘト、ムカムカ、ブンブン、ピリピリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、スイスイ、ヒヨウヒヨウ、ホワホワ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…への主体的な方向転換のおかげであつた。

この主体的な方向転換が、私たちの中にもともと備わつてゐる、自然治癒力の根幹であり、^{こう}再生可能エネルギーの根源なんだ。

再生可能心エネルギーという言葉を最初に使い始めたのは、まさに、究極の再生可能エネルギーという言葉を最初に使い始めたココエ自身だった。

ココエは、この再生可能心エネルギーのおかげで、数々の逆境を乗り越えながら、すばらしい成果を誕生させることができた。

つまり、人類を飛躍させる究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用をもたらしてくれた大元は、再生可能心エネルギーであつたんだ」

「おもしろい♪」

「おもしろいね。だから、みんなは、頭だけでもなく、体だけでもなく、ぜひ、心も大事にし続けてほしい。ココエのように——」

「ハイイ♪」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ありがたいやき、おめでたいやき、
ここえみたいやきミライの
いつかのある日その3

とある学校（17歳～）の冬の授業風景——。

音楽イン ♪冬 Winter

「かつて、人類は病を患い、長い暗黒時代を過ごし続けました。

パイ取り合戦、フルーツ争奪合戦、不満足、不知足、相互破壊、相互絶滅…これらの病——*Against Life* 病に、人類が翻弄され続けた、この暗黒時代を何と呼びますか？」

「“人類の進化の傷あと時代”と呼びます」

「そうですね。この暗黒時代に、人類は、さんざん、不幸を経験し、

不幸をまき散らし合い、不幸を互いに強要し合い続けました。

そう。人類は、何百年何千年もの長い間、まさに病を患っていたのです。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

音楽イン ♪春 Spring

しかし、人類は、病を克服できました」

「誰のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人のおかげです」

「当時の、みんな一人一人の何のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人の気づきのおかげです」

「当時の、みんな一人一人の、何の気づきのおかげでしたか？」

「常識ですよ。Against Life 病が蔓延していること、健全を取り戻すために、最終的に、For All Life の境地に至り続けることが大事であることの気づきのおかげです」

「その通りですね。ココエが活躍していたころから、あらゆる分野、あらゆる場面において Against Life 病が蔓延していることに、みんな一人一人が気づいたおかげで、克服できたのです。

それは、人間社会におけるあらゆる苦難、害悪、罪悪の本質が、“他者らが犠牲になるのはよく、自分らさえよければいい”的な発想、“自分らだけがすべて正しく善良で、他者らはすべて間違えていて悪だ”的な発想に代表される Against Life 病であることに気づいたおかげであり—— 同時に、人間社会におけるあらゆる幸福、善益、功徳の本質が、“自分らだけでなく、みんなも喜ぶことこそがよい”的な発想、“だれもが何らかの正しさを持っている、だれもが何らかのよさ、長所、得意なことを持っている”的な発想に代表される For

All Life の境地であることに気づき、改善したおかげでもあります。

それは、この地球上であらゆる人間社会どうしが争い合い続けることが、個体の中であらゆる細胞社会どうしが争い合い続けるほどに愚かで不健康であることに気づき、改善したおかげでもあります。

つまり、一人一人が、*Against Life* 病が、あらゆる不健全さ——。邪悪さ、醜さ、不毛さ、不調和、不快さ、不信、憎しみ…の根源であることに心の底から気づき、その上で、一人一人が、あらゆる健やかさ——善良さ、美しさ、豊かな実り、調和、心地よさ、信頼、感謝…の根源である *For All Life* の境地を保つように心の底から転換することが、みんなに広まり続けたからこそ、人類全体としても、病を克服できたのです。

この時代のことは、ふつう、何時代と呼ばれていますか？」

「ルネサンス時代と呼ばれています」

「そうですね」

「先生、ルネサンス時代ではなく、ルネサンス時代と呼ばれているのは、なぜですか？」

「かつてのルネサンス時代からアップグレードしていることを明確に示すためであったと言われています。具体的には、再生を意味する Renaissance に、向上の意味が加わっていることを強調するべく発音を変化させるために、スペルも Renaissance に変化したと言われています。

いずれにせよ、ルネサンス時代とは、ルネサンス *For All Life* 時代なのです。このルネサンス時代に、一人一人の気づきがきっかけとなり、それまで人類の中で、ひどく流行っていた *Against Life* ^{はや}

病が克服され続け、健やかな For All Life の境地が広まり続け、ついに全人類の健康に至ったのです」

「どうして、ルネサンス時代に、それが起こったのですか？」

「自然知愛 For All Life をひっさげながら、ココエが登場したこと

が大きかったと言われています。

特に、ココエのりんごの実証実験を通じた気づき、および、その気づきをきっかけとした、心の底からの変化——ピクピク、クヨクヨ、モンモン、ヘトヘト、ピリピリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、ホワホワ…への心の再生や向上——が広まり続けたことが大きかったと言われています。

ですので、ルネサンス時代は、“心再生向上”時代、あるいは、ときに“心笑み再生向上”時代とも呼ばれています。

さらには、ココエの示した再生可能心エネルギーの考えが大きな影響をおよぼしたとも言われています。

——ココエは、次のような言葉を残しました。

“電荷エネルギーや磁極エネルギーがくめども尽きない究極の再生可能エネルギーであるように、心のエネルギーも、くめどもくめども尽きない究極の再生可能エネルギーである——”

彼は、何度も何度も逆境を乗り越え続けながら、健やかな自己フルーツ化——“自己実現 For All Life”を果たしました。

彼は、すてきな“フルーツ For All Life”を生み出しました。

私たちも彼を多いに見習いましょう」

「ハイイ♪」

「そこで、最後の課題です。

みなさんは、どのような健やかな自己フルーツ化——どのような“自己実現 For All Life”を果たしたいでしょか？

君らは、どんな“フルーツ For All Life”を生み出したいですか？

それを、少しづつ、レポートにまとめてみてください。

提出義務は、ありません。

提出期限も、ありません。

高校を卒業してから、提出してもかまいません。

大学を卒業してから、提出してもかまいません。

生計を立てられるようになってから、提出してもかまいません。

結婚してから、提出してもかまいません。

社会人を引退してから、提出してもかまいません。

…

ゆっくり、自分自身を見つめながらまとめてみてくださいね。

もし提出したくなったら、いつでも提出しにいらっしゃい。

教師たちは、代々、受付を引き継いでおきますから——。

今日は、この学校生活、最後の歴史の授業ですね。

少し、早いですが、みなさん、ご卒業、おめでとう。

あなたの活躍を楽しみにしています」

音楽終了♪春 Spring

ありがたいやき、おめでたいやき、 ここえみたいやきミライの いつかどこかのある日

「どうして、多くの異天体人類の中の一部の種は、悲しいほど、病んでしまっているのかしら」

「どうしてだろうね。それにしても、全く気の毒なことさ。1つの天体の中で病み続けて、アンチ非自種の方針をとり続けてしまうことは、1つの人体の中で病み続けて、アンチ非自細胞、アンチ非自組織、アンチ非自器官の方針をとり続けることがもたらす結果と同程度の新たな悲惨な結果を招いてしまうのだから」

「そうね。悲しくてつらいけれど、この新たな悲惨さに自ら気づいて自身で病を克服できるような賢い人類でなければ、宇宙デビューする資格はない。アンチ非自種を正当化し続けるような病み続けている未熟人類は、厳しいけれど、その天体から退場してもらわないといけない。次の新しい人類にチャンスを与えるためにも——。

もちろん、最初から宇宙デビューの資格があるなんてことは稀で、“罪を憎んで種を憎まず”の言葉が示唆しているように、過ちに気づいて軌道修正する可能性がある限り、本来どの未熟人類にも資格を得る望みがある」

音楽イン ♪ Birthtime

「ひとまずは、チャンスを与えられている、この異天体人類に、この病を克服して無事に育ち続けることを期待するしかないですね」

「そうですね。どうかこの病が治って無事に育ち続けますように」

「今回の異天体人類は、この病を克服できて、無事に育ち続けて、健やかな誕生に至り、愛されながら繁栄し、宇宙の宝となれるだろ

うか？ それとも、この病を克服できないで、流産して、あるいは、
中絶させられて、健やかな誕生を果たせず、疎まれながら滅亡し、
宇宙の^{くず}肩となるだろうか？」

「早く気づいてほしいね。この重大な分岐点の存在に——。

この病を克服できれば、存続。誕生。愛され、繁栄。宝。

この病を克服できなければ、流産。中絶。疎まれ、滅亡。^{くず}肩。

そんな、あたりまえのこと——」

「本当に、早く気づいてほしいよ。

この病を克服できなければ、他滅だけでなく自滅が待っていると
いうこと。そんなに、悲劇的でもったいないことに——」

「本当に、早く気づいてほしいね。この病を克服できれば、みんな
が存続できて、健やかに誕生＆宇宙デビューできて、いいことずく
めが待っていること—— そんなに、おいしくてありがたいことに」

「この分岐点の存在を、今すぐ教えてあげたいけれど、自然治癒を
待つしかない——」

「お願い。早く気づいて。早く」

「気づいて、病を克服できれば、この異天体人類も、健やかな恒久
的平和、健やかな宇宙デビューにたどり着ける」

「たどり着いてほしいね。

この異天体人類も、いつか、ここへ——」

「全く、そうだね。——気づいてくれ！ 気づいてくれ！ 克服して
くれ！ 克服してくれ！ どうにか無事に育ち続けてくれ！」

「無事に育って！ 無事に育って！

そして、無事に、宇宙へ誕生ってきて！ そして、この宇宙

の新たな宝になって！ そして、お祝いされて、愛され続けて！」

「ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピーピーピー♪」

「なんですか？ それは」

「はるかなカコから伝わるという、おまじないでござる」

「不思議な響き——。 ——ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピーピーピー♪」

…

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

続・それから何年も後の初夏

(何十年も後)

パッと目覚めた。

そこは、帰郷の際の散歩がてら来ていた、あの地球のかすかな丸みがわかる岬の昼寝ポイント——。

ふと何かの気配を感じた。

見上げると、少女と犬がのぞき込んでいた。

！！！ 思わず身を起こし、そのまま立ち上がった。

だれ？ しばし目をまるくするしかなかった。

「あの—— 私、これを海辺で拾ったので、ここにきました。何か、ご存じありませんか？」 緊張した面持ちで、そう話した少女が、おずおずと、それを目の前に広げて差し出した。

見ると、あの地図だった。 ！！！

今いる場所のところに、○印がついている——。

さらに目をまるくするしかなかった。

そのとき、突然の風にあおられ、彼女は地図を手放してしまった。

「きや！」 ふわりと海の方へと舞い上がり始める地図——。

僕は、とっさに手を差し出してそれをキャッチした。あっふねえ！

「あ、ありがとうございます！」 ほつとして、心笑んでいる女の子。

「いえいえ、どういたしまして」 こちらも思わず心笑んだ。

なんていい子なんだろう。幸せに生きるんだよ。

その瞬間——。 お久しぶり～♪ コンパリーナだよ♪

コンパリーナ！？

そうだよ。いよいよ、私も、フレーム・オーナーにお仕えするこ

とになったんだよ♪ ミスターさんぽには、フレーム・マスターの中のフレーム・マスターとして、これから、よろしくお願ひするね♪

え？ あ、こ、光栄です。こちらこそ、よろしくお願ひします。

それから、こちらの女の子は、ミスター・ココエの娘、ミス・エアだよ♪ その意味においても、よろしくお願ひするね♪

え！？ ^{えあ}あの笑愛ちゃん？ 一瞬、あの正月の日に抱っこした、赤ちゃんのときの笑愛ちゃんが心に浮かんだ。

その通りだよ♪ それじゃ、またね♪ バイバーイ♪

・・・ 初めて出会ったおじいさんが無言で地図をじっと眺めていたときに、起きていたであろうことに、しばし思いをはせた。

——涙が込み上がりそうになるのをこらえながら口を開いた。

「お嬢さん——」

「はい」

「フレーム・フォー・オール・ライフ——ワクワク枠について、聞いてみたくないでしょうか？」

「——。・・・ワクワクワクって何ですか？」

「ワクワク枠というのはね、あらゆるレベルのライフ、あらゆるタイミングのライフ、あらゆる種類のライフのためになる枠フォー・オール・ライフのことです。

「フレー！ フレー！ フレームとも呼ばれています」

「——」 きょとんとしている^{えあ}笑愛ちゃん——。伝わっていない！？

「試しに、“ワク”と、7回繰り返してみてもらえますか？」

「ワクワクワクワクワクワクワク」 指を折りながら^{えあ}笑愛ちゃんは、繰り返してくれた。

「あ、それ、ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワクワクワク♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワクワクワク♪ ワク♪ ワクワクしてくるっしょ？」

「——」明らかに、どんびきしている笑愛ちゃん——。滑った！
こうなつたら、やけくそとばかりに歌つた。

「フォー・オール・ライフ♪ オール・ライフ・フォーエバー♪
オール・ライフ・フォーエバー♪ ピーピピー♪——」

「——ピーピピー♪って、何のことですか？」

「よくぞ、聞いてくれました。ピーピピー♪にはね、深い深い意味があるのです、と言いたいところですが、このメロディーに合うフレーズが、これ以上思い浮かばなかつたのだと同級生の作者に素直に白状された、ほろ苦い高校生時代の思い出があります。あー、ちなみに、この奥深くない歌詞の作者は今、——僕の奥さんです」

「フフッ」父親と母親の両方から譲り受けた、愛らしい心笑みを浮かべている笑愛ちゃん——。笑つた！

「それでは—— まずは、ワクワク枠の1つを今ここで教えてあげよう。すべては、それからです」 そう言って、地図を裏返した。

「では、いきますよ？」

「え？ あ、はい、どうぞ、きてください」

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

さらにもう1つのエピローグ

～分岐点～

【完】

さんぽフルーツ【物語 3.50】『7つのワクワク枠』《10》
さらにもう1つのエピローグ～分岐点～ 2025年12月